
半枯れトリオの旅日誌【中国・世界遺産桂林編】

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半枯れトリオの旅日誌【中国・世界遺産桂林編】

【Nコード】

N2505Y

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

恥も外聞もかなぐり捨てたオヤジ三人組、一家の恥、村の恥、ひいては日本の恥と蔑まれても、今日も行きます地の果てまでも……。

まだ枯れるには早過ぎると自らを鼓舞するも、中途半端な生乾きの三人組だ。

俺あアジの一夜干しがデエスキだ。

ふんでもって人間もグツと旨味が凝縮した中年の半枯れぐれえが一番うんめえもんだ。

俺あが保証すべ。

そんじゃ自己紹介でもするべえ、先ず俺あかんだ。

日本の農業は俺あに任せろ。

後から出てくるアホ二人は俺あを“エロ熊”とか“エロ豚”と呼ぶが、ふんなことはねえ。

真面目一筋の邑中年だ、ど。

ほれ、アホども自己紹介だ。

うんにゃ、俺あがやってやんべえ。

こいつは一見冷静沈着な二枚目だが、実はドスケベの“エロ河童”こと峪口真一。

ほんで、口だけは達者な“エロハゲ”こと施川克己。

まあ、俺あ以外はアホだけど、俺あがしっかりしてっからでえじょうぶだ。

頭脳明晰な俺あとアホ二人の珍道中の第三弾、“半枯れトリオの旅日誌【中国・世界遺産桂林編】”だ。

暇な人は読んでくんど。

第一章 半枯れトリオ上海に集結

第一章 半枯れトリオ上海に集結

一、プロローグ

1

二〇〇六年の国慶節（十月一日）を利用して、峪口真一は“桂林”ツアーへ参加することにした。

上海に駐在して六年、桂林ぐらいならいつでも行けるだろうとの思いから、とうとう今日まで行かずじまいとなっていた。

桂林は日本人に人気の観光地の一つで、中国といえばまずは北京と上海へ、そして二度目、或いは三度目の旅行で訪れる方が多いのではないだろうか。

峪口が四十年来の友施川克己に、国慶節の連休を利用して桂林へ行くと話すと、施川は即座に、

『わしも行く。絶対に行くぞ』と応じた。

「でも、会社は？」

と峪口が訊くと、

『出張、出張。問題ありません〜ん』

との答えが返ってきた。

もうすっかりその気になっている。

「中国人と一緒にツアーだけど……」

『ん、なにか問題あるの？ わしも申し込んでくれ。安いだろう？』

「まあ、確かに安いよ。三千元だったかな」

『一元は十五、六円だろう。三、五、十五……。四〜五万円、とい

つたところか？　あまり安くもないな』

「この時期は高いんだ。連休中じゃなければ千元で十分ナンだけどね。三泊四日だから、前後の日数を入れると六日間は必要になるぞ。それでもいいのか？」

『大丈夫いー。うん、大丈夫いー。出張、出張』

「知らないぞ、社長に怒られても」

『問題ありません』

「それならいいけど。ところで邑中も誘ってみない。ほら、去年のハワイ、計画倒れになっただろう」

『おつ、そうか。邑ちゃんパスポートも取って、やる気満々だったよな』

「ほんと、悪いことしたよ。俺の都合で中止にしちゃってさ。どう誘ってみてくれる？」

『うーん、わしは構わんけど……』

「そうか、そうか。あいつの家はこの時期は忙しいか」

『だろう。……アイツんところは農家だからなあ。去年のハワイ旅行は十一月の予定だったから大丈夫だったけどな』

邑中和年は農家の長男で、大学卒業後に地方公務員として役所に勤めたが、十年後に退職して家業の農業を継いだ。

三人は高校の同窓生で家も近かった。偶然三人は長男である。

それも付き合いが長く続いている要因の一つかも知れない。

「まあ、俺たちが心配しても始まらねえ。とにかく訊いてみてくれよ」

『よっしゃ、わしの力でなんとか引っ張りだそう』

「頼むよ」

そんな電話でのやり取りがあつて、十月三日に施川と邑中が上海にやって来た。

その日峪口は、二人を出迎えるために浦東国際空港を訪れていた。峪口が喫煙場所で二本目のタバコに火を点けると、

「JL791便は、ただ今、定刻通りに、到着いたしました。との場内アナウンスが流れた。

それから二十分も経たないうちに、施川と邑中は同じような小太りの身体を出迎えロビーに現した。

二人とも似たような体型だが、邑中の方が施川よりもひと回り大きい。

「いやいや、お出迎えご苦労しゃ〜ん」

施川はハンカチで頭の汗を忙しく拭きながら、峪口に照れ隠しの礼を言った。

「悪いなあ〜、峪口い〜」

軽い乗りの施川に対して、邑中はほんとうに律儀だ。もちろん性格もあるのだろうが、付き合いの深さにも起因しているのだろう。

峪口と邑中は保育園から高校までの同窓だが、施川は高校に入ってから関係である。

現在の温厚な邑中からは想像できないが、小さいころの邑中はとてもヤンチャで、保育園をたった二ヶ月で退園になっている。

そんな実に珍しい経歴から、峪口に当時の邑中の記憶はなかった。また、峪口と邑中は小・中ともに同じクラスになったことがない。

だからほとんど一緒に遊んだ記憶もない。付き合いが始まったのは、クラスが同じになった高校二年生するときからである。

しかし邑中は酒も遊びもほとんどやらなかったので、大学入学後は、精々年に一、二度旅行へ行くくらいの付き合いであった。

峪口と施川は趣味が似ており、しかも就職した会社が近かったので、卒業後も誘い合ってよく遊んだ。

「ほんとに来ちゃったか」

「へへへっ…、今更そんなこと言うなよ。大変だったんだから、社長への言い訳……」

「そうだろうなあ。六日間というのは長いし、それにオタクの会社に桂林での仕事なんてないんだろう？」

「うん、ない。だからわし、……実は、青島へ行っていることになっている」

「はっははは……、ばれても知らんぞ」

「でもよ。“少し長いですね”って訊かれたから、“青島から上海へ廻ります”って言ったら、社長がニヤリと笑って、“峪口さんによろしく”だってサ」

「あっははは……、そりあ、間違いなくバレてるわ」

「へへへっ……。まあいいや、来ちゃったんだから。精々楽しくやりましようよ、峪口さん。ねえ、邑ちゃん」

「気持ち悪いいな」

施川は、実に楽観的な男である。

「ところで邑中。この時期は忙しいんじゃないかねえのか？」

「うんだ。ふんとは無茶苦茶忙しい。んだから、“俺あ行かねえ”ってゆったんだあ。そしたら恵子が、女房だけんど。その恵子がよお、“久しぶりでしょう。せっかく誘ってもらったんだから、行ってきなさい。後のことは、私がなんとかする”ってゆってくれただあ。へへへっ……」

「おっ、ノロケやがった」

「悪かったな、無理に誘って」

「ふんなことねえよ」

峪口の家も元は農家だったので、この時期の忙しさは知っている。況して邑中の家は、峪口の家とは比較にならないほど、規模の大きな農家である。

「それにしても、良い母ちゃんだよな。アンタにはもったいない。

なあ、峪口いゝ」

「それは言える。何度か会ったことがあるけど、ほんとに優しい嫁さんだ」

と峪口が相槌を打つと、

「そおでもねえべよお。ああ見えて、恵子はきついんだかな」

邑中が力を込めて言い切った。

「はっははは……、どこも同じだ。カミさんには頭があがらねえな」

「その通り、触らぬカミ（神）に祟りなし、ってナ」

と言う峪口 of 言葉を受けて、三人は大声で笑った。

4

三人は、ごった返す出迎えロビーを抜けて、タクシー乗り場へと向かった。

「さつき随分歩かされたな。まるでデイズニーランドの順番待ちみたいだ。普通はあんな長い距離歩かないよな」

施川が不満気に呟いた。

「出迎えの人たちが来客を見逃さないように、グルツと歩かされるのさ」

「まるでベコ（牛）の品評会だんべえ」

邑中が農家の人間らしい喩えを言った。

「名前を書いたボードを持っていただろう」

成田空港なら出迎えロビーにわずかな柵しかないが、浦東空港では九十九折^{ツツラ}り状に歩かされ、キラキラした視線を浴びる。

少し照れくさい。

「オキヤクサン。タクシーハ、コツチダヨ」

「おッ！ なんだ、いきなり」

出口のところで風体の良くない男から声をかけられ、施川が驚きの声をあげた。

「不要、謝謝。ほら、向こうだ。行くぞ」

「峪口いゝ、オメエゝ、今、なんてゆつたんだあ？」

「いらぬ、ありがとうだよ。わしにもそれくらいはわかる。なにしろ、上海へは何十回も来ているからナ」

「そんなに来てるのかあ。ふんとかあ、峪口いゝ？」

「嘘嘘。精々、二、三回だろう」

「なんだ。相変わらずオメエは大げさだなあ。ところで、さっきの男はなんだあ？」

施川が指折り数えている。

あんたの頭は十進法か……。

「アイツか、あいつは白タクだ」

「へゝえ……白タク。まだ、そんなのがいんだあ？」

「最終電車が到着するころになると、松戸でも柏でもウヨウヨいるよ」

「俺あ、遅い電車に乗ったことねえからわかんねえ」

と応じる邑中に、

「邑中は高級車に乗っているからな。電車なんて滅多に乗らないんだろう」

と、施川が冷やかすように言った。

「あんなの高級車じゃあんめえよあ。六百万ぐれえのもんだあ、てえしたことねえべ」

「邑中の金銭感覚はわしらとはだいぶ違うナ。わしはジャガー貯金しているけど、ぜんぜん貯まらねえ」

「なんだあゝ、そのジャガー貯金つてのは？」

「へへへへっ……、ジャガーを買ったための貯金だ。わしはあの車が大好きナンじゃ。いつか必ず買う」

施川の目に炎が燃えあがった。

「俺あまた、あんな猛獣買って、どうするんだべえと思った。へへへっ……、車かあゝ」

「かあゝ、じゃなくて、カー（CAR）だよ」

二人で訳のわからないやり取りをしている。

「オメエの場合は飲み過ぎだんべえ。酒を止めれば、直ぐ買えんべえ」

「はっははは……、そいつは無理だ、無理。タバコは止めたけど、酒は、ぜったいに無理。うん、それだけは自信持って宣言する」

「邑中の車は、確か、クラウンだったよな？」

「うんにゃ、クラウンは前のだ。今はフォーガ。典和、息子にせがまれて買い換えたんだあ。息子にだよあ、俺あが欲しかったわけじゃねえよあ」

「どつちでもええがナ。なあ、峪口い」

「ああ、ところで息子はいくつだ？ ずいぶん渋い車を欲しがるとやねえか」

「二十五、あれ、六だったかな……」

「いいの、言い訳は。それにしても、毎年買い換えているじゃなの。税務署が来ても知らねえぞ」

「ふんなことねえよ。オメエらしつけえなあ。毎年じゃねえよあ。三年に一回だとお、普通じゃねえぞ、それは。ものすごい贅沢ちゆうモンだ。わしんとこなんか、自慢じゃねえが、もう十年以上同じに乗っている。それもベンツじゃなくてブルーバードだ。さすがは邑中様、御大名様だ」

「もう、いいよあ。施川はしつけえなあ、相変わらずよあ」

二、日本人は力モ？

1

白タク紛いの客引きが力モを物色している。

タクシー乗り場が混雑しているからといって、うっかりこんなのに乗ると、べら棒な料金を請求されることになる。

それでも北京と比べれば、まだかわいいものだが。

「俺が前に乗る。二人は後ろへ乗ってちょうだい」

峪口が行き先を告げると、すかさず運転手が、

「どの道を行いますか？」

と訊いてきた。

「廬浦大橋ッ！」

峪口は少し語気を強めて答えた。

「日本人と見ると、ああやって、道を知っているかどうか確認するんだよ。わからないから任せる、なんてゆったら、豪い遠回りされるぞ」

「うへえ、ふんとかあ？ 中国つてところは油断も隙もあつたモンじやねえな。ああ、おつかねえ」

邑中が心細げに言った。

「ああ、でもこの連中なんて、まだかわいいものさ。さっきの白タクと比べればね。精々、二、三十元分、遠回りをするくらいのモンだ」

「し、白タクだと、どうなるんだよあ？」

「まあ、二倍は要求されるだろうな。それでも命までは取られないからナ。はっははは……」

「まさか、施川あ…オメエ、引つかかったンじゃあんめえ？」

「ずばり」

「シッ！ 峪口。内緒、内緒」

「へへへへ……、施川らしいや。だいたいオメエは、昔つから落ちて着きがねえモンなあ」

「落ち着きのないのは、親譲りじゃ。親に文句言ってくれ」

「なんでも親の所為にすんじゃねえ。ふんでも、金で済めばええかあ。ところでよお、峪口い、明日は何時の出発だあ？」

「ええと……、確か、午後一時半の便だったと思う。後でよく確認するよ。出発は虹橋空港から、でも帰りはここ、浦東空港からだ」
「ふたつつあんのか、空港？」

「うんだ」

虹橋空港なら市内まで三十分、浦東空港だと小一時間はかかる。以前は国際便も国内便も虹橋空港を使っており、その上、空港までの高速道路がなかったため、空港も市内の道路も大混雑をしていたものだ。

しかし日本と違って、上海市内の高速道路は無料なので助かる。もつとも、いきなり、なんの前触れもなく封鎖されることを除けばだが……。

最近、羽田空港と虹橋空港間の便が飛ぶようになったので、ずいぶんと便利になった。

「じゃあ、朝はゆっくりだな。今晚は飲みに行くか。この前のカラオケは良かったなあ。かわいい娘ちゃんがたくさんいて、名前はなんてゆったかな。なあ、峪口い、覚えてる？」

「バカ、知るかよ俺が。……でも、この前、糖尿病がどうとか言ってたけど、いいの、飲んで？」

「ああ、あれねえ。この間人間ドック行ったら、“劇的に改善しています。よく頑張りましたね。これからも続けてください”って医者に褒められたんだ。だから飲んでもいいの」

「喉元過ぎれば、ってやつだな」

以前、生死を彷徨うような大病を患いながらも、“わしは一度死んだ人間じゃ”が口癖の、実に脳天気な男でもある。

2

「あれかい、リニアは？」

施川が突然、道路に沿って走る高架を指差した。

「そうそう。運が良ければ見られるかもしれないな」

「この間、事故があったんじゃない？」

「えッ！ そうなの？ 俺、知らなかったなあ」

「ドイツでもデカイ事故があったじゃないか。確か、同じころだっ

たと思うよ」

「へーえ、知らなかった。こっちじゃ都合の悪いニュースは流さないからね」

「電気系統が焼けたとか、ニュースでゆっていたよ。上海のもドイツ製だろう」

「ああ、そうらしいね」

峪口の部屋のテレビにもNHK放送は入るが、先日もアナウンサーが、「天安門事件から十……」と声を発した途端、プツンと映像が消えた。

チャンネルを合わせても、調整中のテロップが出て映像が映らなかつたり、ノイズで見えないことがときどきある。

「リニアは、日本じゃ何十年もテスト走行を繰り返しているのに、実用化は少し早いんじゃないのかなあ。なあ……？」

と、施川が峪口の肩を叩きながら同意を求める。

「えっ？ うん。……駐在員同士でよく冗談に言うんだけど。中国は金を取って人体実験している、って」

「機会があれば乗ってみようと思っていたんだけど、止めておこう」
「俺も要ンね。絶対に乗んなえかな。乗るンなら、オメエ一人でどうぞ」

邑中はブルブルツと首を振った。

タクシーは、前に車がいるのが許せないとばかりに、飛ばしに飛ばす。

「荒っぽいな。別に急いでないし、リニアと張り合わなくてもいいから。峪口い、なんとかゆってくれよ」

「彼らは回数だからナ。早く俺たちを降ろして、空港に戻りたいんだよ」

「峪口い、前の席はおつかねえべ。シートベルト締めた方がいいどお」

「締めたインだけど、壊れているんだ。まあ、こんなモンさ」

上海の運転手は元々輪タクあがりが多い。

七、八年前までは輪タクが我が物顔で道路を塞いでいたものだ。しかし、突然の政府命令により上海市内は全面禁止となった。その代わりの職として、彼らにタクシーの運転手の資格が与えられた。

大した試験もなかったらしく、結果として運転技術の未熟な者や交通ルールさえ知らないような連中が、運転手として多数排出されたのだ。

まさに粗製濫造である。

3

「それにしても広道ひれえだなあ。きれえに整備されている。おうおう、工場がいつぺえだあ。あれっ、パナソニックてな、ナショナルだんべえ？」

「うん、そうだよ。この辺りは日系企業も多いんだ。空港も港も近いからね、上海市内へ三十分ぐらいだ」

「さっきまでは荒涼とした畑が続いてたけど、この辺はマンションがいつぺえ並んでんなあ。一戸建てつてのは、あんましねえのかあ？」

「あるにはあるけど、ほとんどマンションだ。上海人は一戸建てに住むのが夢だ。まあ、最高の贅沢だな。市内で一戸建てなんていったら、何億円もするよ」

「あのマンションなんか、いくらぐれえすんだあ？」

「そうだなあ…この一年で、五十パーセントぐらいは値上がりしたから、平米当たり一万元、日本円で十四、五万円てとこかな。内装はなしだよ」

「てえことは、百平米で千五、六百万円か。随分安いなあ。一年で1.5倍かあ」

「邑中、買っちゃえよ、十戸ぐらい。そんで、わしに一戸くれよ。」

「へへへっ…」

「うん……」

「おい、本気か？」

やがて武装警察の訓練所が見えてきた。

「武装警察？ なんだかおっかなそうだな。施川あ、オメエ顔隠せ」

「おつ、やべえ、やべえ」

施川は腰を折って膝を抱えた。乗りのいい男だ。

「やや、あれは橋か？ あっちにも……、あれ、こっちにも……」

邑中が驚きの声をあげた。

4

「^{ファンプージャン}黄浦江にかかる橋だよ。俺たちがこれから渡るのが^{ルーパイ}廬浦大橋、右の方は^{ナンプー}南浦大橋、左が^{シープー}徐浦大橋だ」

「ファン、プージャンって、なんだあ？」

「黄浦江、川だよ川。こつちじゃ大きな川を^{ジャン}江て言うんだ」

「ふんじゃ、あの団子を串刺しにしたみてえなのはなんだべえ？」

「ふふふふ……、邑中君、ぼくが教えてあげよう。あれはテレビ塔、わしは登ったことがある。でもって、隣のデカイビル、あれが……」

？ あれ、峪口、なんだっけ？」

「へへへっ……、なうんだ、知らねえんじゃねえか」

「あれは^{ジンマオ・ターシヤ}金茂大厦、今は中国一だけど、間もなく隣にできるビルに抜かれる」

「あつ、知ってる。わし、それ知っている。日本の森ビルだろう」

「おつ、施川君。エライ、エライ。ほら、霞んでいて良く見えないけど、半分ぐらいできているだろう。わかるか？」

「ん、……どこだあ？ どこだあ？」

邑中が窓から身を乗り出した。

「ほら、あのビルの隣だよ。確か、再来年（'08）の完成のはずだ」

「ふん。世界一かあ？」

「いや、世界一は台湾のビルだよ」
「へーえ……、台湾に気を使ってんだんべえ」
「はははっ……、そうかも。でも、中東のドバイだっけ、バカデカイの造る計画があるだろう。もう始まっているのかな」
「あつちは、石油のアブク銭があるからなあ。金の使い道に困ってるんだろつよ。わしの会社に少し回してもらいたいモンだ」
「相変わらず赤字か、オメエんとは。おっ、橋だ、橋だ。これはなんて名前だっけ？」
「ロープー・ダツチャベだよ。いい加減に覚えなさい、邑ちゃん」
「違っべよお。ループーだんべ。なあ、峪口い」
「うんだうんだ。邑中君が正しい」
「あんれえ。この橋、登れるンじゃねえのかあ？」
「ああ、登れるよ。アーチ部分が五百五十メートル、世界最大つてことだ」
「オメエ、よく知ってんなあ」
「ほら、あの左手に、川の向こうに見える尖がり屋根の建物。俺、あそこに二年間住んでいたんだ。この橋のオープンセレモニーも部屋から見ている」
「わしが泊めてもらったとこだな」
「そうだ。右手の方で派手に工事をやっているだろう。ここが上海万博（'10）の会場になるんだ」
「へーえ。ふんで、この川はなんだっけ？ まさか揚子江じゃねえよなあ？」
「邑ちゃんはうるさいな。まるで、小学生の遠足だ」
「いいべよお、俺あ初めてだもん。施川みてえに、何十回も来てねえもんよお。へえへへっ……」
「俺も最初は揚子江かと思った。でも、うちの従業員に笑われたよ。『長江』はこんな小さくないって」
中国人は揚子江と言わず、長江と呼んでいる。
揚子江という呼び名は長江の上流部の一部をさす。

「これでちつちえのかよお。ウソだんべえ」

「いや、揚子江の河口は向こう岸が見えないそうだ。中州に島があつて、何千人も住んでいるんだつてサ。岸から岸まで四十キロ以上あるそうだ」

「へーえ……、やっぱり中国はスケールが違うわあ。なあ、施川あ」

「わしゃ大連で生まれたんだ。昔の満州じゃ……」

「ふんとか!? オメエは残留孤児だったのかあ?」

「バカ、そんなわけねえだろう。わしは昭和二十五年生まれじゃ」
「昭和十五年の間違いだんべえ。そのハゲ頭見つと」

「じゃーまし。その毛皮、筆るぞ」

やがて、高速道路を降りたタクシーは淮海中路に入った。

上海のメインストリートもいえる淮海中路はさすがに混んでいてスピードを出せない。

峪口はホツと安堵のため息をついた。

「オメエ、毎日日こんなのに乗つてんだあ」

と、邑中が眉を曇らした。

「はははっ……、もう開き直り。年に四、五回は危ない目に合っているよ」

「四、五回、も……。オメエ、よく生きてンなあ」

ぎっしり車が詰まっているにもかかわらず、運転手は右に左に車線を変え、クラクションを鳴らし続ける。

「それにしてもよく鳴らすねえ、こつちの運転手さんは……」

施川は呆れたとばかりに大声で言い放つたが、運転手に通じるはずもない。

「これでも随分良くなったんだ、以前と比べればね。数年前に“ムダクラ禁止令”が出たんだ」

「なんじあ、ムダクラってよあ？ キヤパクラみてえなもんかあ？」

「おつ、キヤパクラときたか。こら、熊、よく行くのか？」

「へへへっ…、俺あも男だんべよあ。たまにはなあ……………」

「なにやった？」

「えへっ、えへへへっ……………」

「気持ちの悪い笑いしゃがつて、気持ちよかつたか？」

「うん、えがつたあ……………」

「あつ、このこの」

「いで、やめれ。いでつてばよお施川あゝ。あつ、くへっ、くくく

……………」

「はははっ…、俺の造語、無駄なクラクションだよ」

「おつと、危ぶねえ。それにしても凄い割り込みをするなあ。日本なら間違いなくケンカだぞ」

「うんだべえ、施川あゝ。オメエなら二、三発はぶん殴つてンべえ」

「おもしろいんだよ、上海人は。一旦割り込んでしまえば、割り込まれた方は文句を言わないんだ」

「おつ、あんたい腕してるね。いやあー、いい度胸してるよ、ほんと。その腕と度胸に免じて許してやるか、といった感覚かな」

「おつ、施川さん、よくご存知で」

「あらあゝ、そうなのおゝ」

「ようやく東湖路に辿り着き、そこを右折すると峪口のマンション嘉麗苑である。」

「料金は百四十五元、峪口が交通カードで支払いを済ませた。」

「このカードは便利で、日本のパスモより多くの機能を備えている。導入も日本より早かった。」

「このように、中国は最新のモノを取り入れる。」

「電話もいきなり携帯電話が普及、途中省略、だから発展も一足飛びだ。」

三、上海のマンション事情

1

峪口はマンションのガードマンに、施川と邑中の来訪を知らせ、よろしく頼むと挨拶をした。

施川は調子よく、“ニイハオー。よろしくねえ”と笑顔を振り撒く。邑中は身体を九十度に折り曲げて、“こんにちは。よろしくおねげえします”と日本語で律儀な挨拶をした。

峪口の部屋は十八階、部屋に足を踏み入れた施川が、

「おっ、けっこう綺麗に片付けてあるじゃん。これでもいるんじゃないのぉ〜？」

と言って小指を立てた。

「アホッ！ あんたとは違う。週に一度、掃除のおばさんに来てもらっているんだ」

「おばさん？ 若いおばさんじゃねえのぉ……」

と峪口を横目で睨む。なかなか、鋭い男である。

「まだ言ってるよ、この男は。ほら、オマエさんたちはそっち部屋を使えよ」

「おおっ、デッカイベッドなこと。……邑中と寝るにはもったいなえな」

「俺あだつてやだンベえよお。俺あソファアで寝てもいいかあ？」

「よおーし、じゃあ、邑ちゃんはあっちネ。ところで峪口い、便所はどこだ？」

「そことあそこ、二つあるから好きな方を使えよ。なんなら両方一緒に使ってもいいぞ」

「いくらわしが天才でも、便所はひとつで、あらら、シャワーも二つかよ。すっんげえ贅沢」

「けけけっ……、バカと天才は紙一重ってゆうべえ」

「おっ、邑ちゃん、ゆってくれるじゃないの。うりうりうり……」

「くすぐつてえよお。えへっ、えへへへ、えへっ…、やめてくれえ
ー。くすぐつてえよお。峪口いゝ、助けてくんどお。うへっ、へ
えへへへっ…」
「いつまでも遊んでいる」

2

峪口の部屋は台湾人の所有物で、築十年以上経過しており、あちら
こちらの傷みが激しい。
政治的に中国と台湾はいがみ合っているが、企業は中国にたくさん
進出しており、資金も大量に流れ込んでいる。
中国人が台湾に入国するのはとても難しいが、台湾人が中国に入国
するのは簡単だ。

それは当然かもしれない。
なぜなら中国政府は、台湾を中国の一つの省と位置づけているのだ
から。

したがって台湾人という存在はなく、住民は全て中国人ということ
になる。

2LDKでベッドルームが二つ、トイレもシャワーも二つ備えてい
るが、それは外人用マンションとして、上海では普通の間取りであ
る。

「独り住まいにはムダ、広すぎる」

「ほんとにいゝ、ひとりいゝ?」

と言って、施川は洋服ダンスを開ける仕草をした。

「アホッ! しつこい奴だな」

「施川あゝ。あんまし他人の部屋を勝手に開けるモンじゃねえどお」

「へへへっ…。ところで、ここの家賃はいくら?」

「一ヶ月千二百ドル」

「いくらだあ、一ドルが百二十五円として、十五万円ぐらいか。高
つけえーッ!」

「そうかなあ。この都心だけ。それに治安も大切だろう」

「そらそうだ。礼金とか敷金はあるの？」

「礼金はなし、オーナーが払うだけ。でも、保証金が家賃の二か月分必要だ」

「敷金みたいなものか？」

「そう。でも途中で解約すると、全額没収される」

「十八階かあ……。俺あ、こんなたけえとこで寝るのは初めてだあ。

「なんだか、ケツがこそばゆくってよあ。ふんでも、地震があったらどうすんべえ？」

「邑中が窓から外を見下ろして不安げに呟いた。

「もちろん上海は壊滅するよ。なにしろ、地震がないことを前提に建物が建てられているから、基礎工事は相当軟いと思うよ。ここなら姉齒さんは大歓迎される」

「あのハゲがかあ……」

「あつ、その言葉、胸にグサツときた。上海人は、上海には地震がないと、自信を持っているわけね」

「うまいこと言うね、さすがは施川さん。でも大丈夫だよ。上海はニューヨークと同じで、岩盤の上に造られた街だから、ほんとうに地震が少ないそうだ。うちの従業員の話だと、身体に感じたのは、今までにたった二度だけだつて」

「何年間でえ？」

「あいつは、三十五、六だったな」

「ふんでも、ねえ（ない）って言い切れねえべえ」

「それはそうだけど、まあ、確率的には相当低いってことだよ」

「来たら、来たで、しょうがねえよ、熊ちゃん。そんなときゃ、諦めてちょうだい。死ぬときは、どこにいたって死ぬんだからよ」

「施川あゝ、オメエの頭はお気楽でいいなあ」

「なにッ！ ハゲげだとお」

「ははは……。そうゆう奴に限って、いざとなると慌てふためくモンなんだ」

「うんだあ。施川はどうでもいいけど、俺あ、まだおつちに（死に）たくねえ」

「わしはどうでもいいだとか、わしんとこの母ちゃんの前で、もう一度その言葉が吐けるか、ええーっ？　しかし、それでよく飛行機に乗ったなあ？」

「ふんとだよなあ。ふんとだあ」

邑中の身長は峪口の百八十センチより少し低く、施川の百七十センチよりは少し高い。

体重はどう鼻肩目にみても九十キロはありそうだが、本人は八十キロだと言っている。

施川の体形は邑中とよく似ているが、施川がひと回り小さい。

そして二人とも、負けず劣らずヒゲが濃い。

施川のヒゲは濃いが頭髪はかなり寂しくなっている。

3

数年前まで外国人の住む居住区は限られていて、家賃が五千ドルなどというのも当たり前のことであった。

仲介する不動産業者は、借り手と貸し手の両方から礼金を取るのが普通で、ぼろ儲けた業者も多いことだろう。

最近マンションの乱開発から競争が激化、オーナー側だけから礼金を取るのが普通になっている。

そういった情報が身近にいくらかもあるにもかかわらず、素直に手数料を支払っている馬鹿な連中もいるにはいるが……。

もっとひどいになると、仲介業者に、『家賃が二千ドルぐらいのマンションを探して欲しい』などと頼む間抜けな日本人もいるらしい。

これはまさに鴨葱で、一番やってはいけない愚の骨頂である。

先日、この二つのことを同時にやってしまった間抜けな連中の話を聞かされた。

しかもその仲介業者は、その間抜けな連中の会社と日本で取引関係にある日系企業だというから、お笑いである。以前は、中国の企業が日系の企業を騙すというのが、お決まりのパターンだった。

しかし最近では、日系の大企業が新参の日系企業を騙す例が増え、訴訟が絶えないと、上海に駐在している友人の弁護士から聞いた。彼はそんな日系企業のあり方に、警鐘を鳴らし続けている。理由としては、駐在員の駐在期間が考えられる。

大企業では三年ぐらいが目安で、その期間に成果を挙げないと、帰国後のポストに影響するのだ。

故に、日系同士でも将来を見据えてとか、長い目でお付き合いを、などと悠長なことを言っていられないことになる。

最大の要因は、日本本社のあり方にある。

峪口自身、六年間の駐在生活で部屋を五回替えている。一度目の理由は、家賃の高騰である。

再契約に当たって五割ほどの値上げを要求された。

二度目のときは、わずか数ヶ月の間にガス漏れ一回、水漏れ三回、漏電一回と立て続けに事故が発生、身の危険を感じたからであった。三度目は、新築のマンションで黄浦江に面した眺めの良い立地で、ようやく落ち着けると思ったが、冬になると風向きが変わり、対岸の鉄鋼所が出す煤煙が部屋を襲った。

その臭いと塵にたまらず、引越しを決意した。

そして四度目は、二度目と同じような事故の多発が原因だった。

事故の度に修理にくる技師に、“この部屋の資材は相当悪いものが使われている。全部交換しないと、いつ事故が起こってもおかしくない”と指摘された。

そこで契約切れを待って、今のマンションに移った。

もちろん、入居前に電気系統、ガスと水道の配管などを徹底的に検査させたことは言うまでもない。

四、上海市内散策

1

「さあ、まだ夕飯には少し早いな。散歩でもするか?」

「峪口い。さつき見えたテレビ塔、あそこは遠いのかあ?」

「いや、そうでもない。タクシーなら二十分もあれば行けるよ」

「俺あ、行ってみてえなあ。駄目かあ?」

「つまらないよ、あんなどこ」

「施川あ、オメエは行ったことあんだべえ。何十回もよあ……」

「そうだな施川、行くか。邑中は初めてだし……」

「しょうがねえ。かつたるい(めんどくさい)けど、付き合っただるか。邑ちゃん、ありがたく思えよ」

「うん。あんがと」

三人は、浦東地区にある“東方明珠塔(テレビ塔)”でタクシーを降り、外灘の老上海の景色を反対側から眺め、国際会議中心から黄浦江の地下に掘られた外灘観光隧道トンネルを通って、浦西側の南京路に出た。

外灘の古い建物を眺めながらブラブラ歩き、和平飯店ホテルを右折して、南京東路の遊歩道を西に向かって歩き出した。

「ひよえーッ! もんのすげえ人だなあ」

邑中があまりの人の多さに驚きの声をあげた。

もつとも邑中でなくとも、上海の観光地、特に外灘や南京路の人の多さには、思わず目を剥くことになる。

況してや、今は国慶節の連休中である。

「今は国慶節(10/1)だからナ。ほとんど地方からの観光客だよ」

「オノボリさんか」

「君たち二人もねっ……」

「へへへっ…、うんだ。しかしひれえ（広い）歩行者天国だなあ。それになんげえ（長い）しよあ」
「長さは世界一っていうな、こっちの人たちは」
「夜んなつとこのネオン、すんげえだんべえ。香港みてえによあ」
「邑中、香港へ行ったことあるのか？」
「俺あだつて、香港ぐれえ行くべえよ。去年も農閑期に母ちゃん連れて買い物行った。農閑期は安いべえ。飛行機とホテル代込みで、一人サン・キュツ・パだ。温泉行くよつか安いモンよあ」
「ダイヤモンドの詰め合わせでも買いに行ったのか？」
「うんだ。俺あこの時計、母ちゃんには指輪とネックレスと時計、うんと……？」
と指折り数えながら邑中は、金張りのゴツイ腕時計を曝した。

2

「おつ、そ、それつてあれか、本物か？ さつきから気になっていたんだけど、百万ぐらいするだろう？」
施川が目を剥いて言った。
「うんにゃ、百五十ちよつとだあ。安かんべえ、日本で買ったたら三百万以上はするどあ」
「安かんべえつて、やっぱりわしら平民には、お大尽様の金銭感覚に付いていけねえ」
「おい、早く仕舞えよ。そんなの持つて来るなよなあ、まったく。泥棒に狙われても知らねえぞあ」
と言う峪口の言葉に、邑中が慌てて時計を隠した。
「へへへへ……、大丈夫だよ峪口い。誰も本物とは思わないよ。どう見たつて、高級時計の本物を持つ顔じゃないもの。なあ、邑ちゃん」
「そついえば施川、オマエさん、この前上海に来たとき、ニセモノのローレックス買って帰つたな」

「シッ！」

「あんだあ、ありあニセモンか。オメエ随分自慢してたんべよあ。変だとは思ったんだあ。オメエみてえなケチンボがよあ。なんだ、やっぱりニセモンかあ。ふうん」

「へえへへ……、ばれちやったか。安月給のわしに本物が買えるわけねえだろう、どう考えたってよあ」

「へへへっ……、そりやそうだ」

などとバカなことを言い合いながら、三人は南京路を西に向かって人民公園まで歩いた。

そこから地下鉄に乗って峪口のマンションのある陝西南路駅へ向かった。

その晩、施川はいつものように、ビールから始まり日本酒、ウイスキーとグイグイと呷り、カラオケで演歌をかなりたて、いつの間にやら小姐（女性従業員）の膝枕で寝息をたてていた。

時刻を見ると、既に十二時を回っている。

「しょうがねえなあ、まあったく。こおんなに酔っ払ってよあ。家で飲ましてもらってねえんだんべえなあ、きつと」

酒も歌も女性もあまり得意でない邑中には、苦痛でしかない長い長い時間だったことだろう。

しかし彼は、そんな不満をおくびにも出さず、薄い水割りをチビチビと舐めながらひたすら耐えていた。

気遣いのできる男である。

峪口と邑中で施川を部屋に連れ戻り、寝かしつけてからシャワーで汗を流した。

ようやく、二時過ぎにベッドに横たわれたが、邑中はほんとうにソファで寝るはめになった。

第二章 世界遺産、桂林へ

一、出発の朝

1

翌日の早朝……。

「……おい、……おい。……起きろよお」

遠くに施川の声が聞こえ、峪口は目を覚ました。

「うづうづん。……今、何時い？ オマエ、隋分早いなあ」

峪口が眠い目を擦りながら施川を見ると、もう缶ビールを手にして
いる。

酒となると、時と場所を選ばない男である。

「なにいつてんだよ、もう十時だぜ。これ、冷蔵庫にあつたからも
らったよ」

と缶ビールをかざしてた。

「それは構わないけど、昨日の酒、残らなかったのか？」

「へっ、へへへっ…、迎え酒だよ、迎え酒……」

「まったく強いなあ、施川は……。俺、すこし頭が痛いよ」

「ふんだ。まあ〜たく、昨日あんだだけ迷惑かけたのに、いい気なも
んだべよお。その上、朝っぱらからガタガタうるせえしよお」

邑中がソファーからむっくりと起き上がって言った。

「えっ、えええっ、わしがなんか迷惑かけたあ〜？ 峪〜口い〜、

二日酔いなんて、そんなの、飲めば直っちゃうよ。一本、持ってこ
ようか？」

施川が台所に向かおうとするのを、

「いい、いいよ、俺はいい。それよりオマエ、なんにも覚えてねえ
のか？」

と慌てて制した。

「ん？ なにがあゝ？ そうか、いらねえのか。じゃあ、わたしも
う一本、と」

「まったくよあー、施川には勝てねえべ」
邑中が呆れ顔をしている。

「まあまあ、邑中。今に始まったことじゃないだろう。それより、
なんか喰わなきゃな」

と峪口が言つと、

「冷蔵庫見たけど、なあーんにもねえな」

呆れた、とばかりに施川が首を振った。

「上に凍らした飯があつただろう、雑炊でも作るよ」

「よし、わかつた。わしが作つてやる。峪口は旅行の準備をしる。

邑中君はクソでもしていてくれえ」

「おつ、珍しいことがあるモンだ」

昨晚の罪滅ぼしのつもりか、施川が珍しく気遣いを見せた。

2

峪口がカーテンを開けると、窓の外は爽やかな秋晴れで、上海には
珍しく青空が広がっている。

「おお、なんていい天気だんべえ。峪口から上海には青空がねえつ
て聞いてたけど、どうしてどうして、すんばらしい秋晴れじゃね
えかあ。これも俺あの心がけがいいからだんべえ。へへへ……」

「なあゝにが俺あの心がけじゃ、早くクソしてこい」

「うん」

「ちゃんと流しておけよ」

窓の側に近づいて来た邑中が、峪口の背中越しに、外を見ながら言
つた。

「おつかしいなあ。邑中の心がけが良いのはわかるけど、あつちに
いるのは、それ以上に心がけが悪いはずだからなあ。なあ、施川あ」

「あ、あゝん？ なんかつたかあゝ？」

「なんでもねえよお。オメエはいいから、早く、飯作れよお」
「へえーい、合点だ」

台所から機嫌のいい返事が返ってきた。既にビールが入っている所
為か乗りがいい。

上海は黄砂の影響か、建築現場が多い所為か、空はいつも霞がかか
ったようにどんよりとしていて、滅多に青空を見せることはない。

上海のスタッフは、それでも晴れだと言いつ張るので、峪口は一步譲
つて、そんな天候を“上海晴れ”と名付けていた。

「おお、いい天気だこと。もう直ぐできるからなあ。うまいぞおー、
わしの作った雑炊は」

「へへへ……、どうだんべえ。峪口いゝ、正露丸はあつかあ？」
「熊ちゃん、あんたはゴミ箱でも漁つてなさい」

上海は緯度的にかなり南だが、気候はだいたい東京と同じで、一年
に一度ぐらいは雪も降る。

やがて台所から施川が、
「雑炊ができたぞおー！ こっちへ来いよおー！」
と叫ぶ声が聞こえた。

雑炊は醤油味で卵を落とし込んである。

峪口はひと口味わい、その味に驚いた。

「うまいッ！ うまいよ。……雑炊のダシは、なんで取った？」

「おっ、ふんとだ。うんめえ、うんめえ。やればできんじゃねえか
あ。ただの酔っ払いだと思つてたけど、見直したべえ。へへへへ
っ……」

「脳ある鷹は爪を隠すつてナ。棚にダシの素があつたからたつぷり
と入れた。わし雑炊は自信あるンじゃ。鍋料理の後は、いつもわし
が雑炊を作るんだ。これだけは負けねえよ。娘もわしの作ったのが
一番うまいつてゆうもの。むふふふ……」

施川は娘の顔を思い浮かべたのか、ニヤケタ顔で自慢した。

「そうかあ、ふんじゃあ、ついでに後片付けも頼むべえ」

「あららあ……、邑中君、それはねえべえ」

唯一映る日本語放送のNHKニュースを見ながら、三人はしばらくの間、昔話に花を咲かせた。

「さあーとと、十一時半だ。そろそろ出かけようか」

「空港まではどのくらいかかるの？」

「そうだなあ……、混んでいなければ、三十分ぐらいのモンだ。忘れ物するなよ」

マンションの入り口のガードマンが、三人の姿を見て、

『どこかへ旅行か？ ……そうか、桂林か、うらやましいな。俺たちは仕事だ。なあ、相棒』

と隣の男に話し掛け、

『まあ、楽しんできなよ。俺たちの分もな』

と言って、ニツコリと微笑んだ。

二、えつ、中国人が並ぶ……？

1

峪口の懸念は危惧に終わり、高速道路はガラガラ、三十分ほどでタクシーは虹橋空港に到着した。

「おい、峪口い。道が空いていてよかったと思ったら、カウンターは長蛇の列だよ」

「ふんどだあ。こんじゃ、時間がかかんべえ」

カウンターの前には、百人ほどの客が並んで順番を待っていた。

「でも、以前と違って、中国人もちゃんと並ぶようになったじゃない。わしが初めて上海へ来たのは、この空港だったよな。あんどきは酷かったあ」

「そうだ、あのころ浦東空港はまだ工事中だった。確かに以前は酷かった。並ぶというよりも、群がるといった感じだったものなあ」
それはほんとうに酷いものだった。

人々はカウンターを取り囲むと、いたるところから手を出す足を出すといった状態で、空港職員はそれを注意もせず、手近からただ機械的に処理していただけだった。

当時は、日本人には耐えられない惨状を呈していた。その日は空港職員の適切な誘導もあり、手続きは二十分ほどで完了、三人は気分良くゲートへと向かった。

「また引つかかっちゃったよ、探知機に。ベルトまで外したんだけどなあ。パンツも脱がなきゃ駄目かな。へへへ……」

施川が不満げに皮肉を言った。

「俺もサ。経験上、中国では九十パーセントは引つかかる。見てみると、ほとんどの客が引つかかっているだろう」

「きつとあれだんべ、裏で釦を押してんだんべえ」

と言つ邑中を、

「邑中はパンツを脱いでも駄目だろ。なにしろ、金物がデカ過ぎる」と施川が茶化した。

「あつ、はっははは……、確かにデッカイ。いやいや、北海道では驚いた、驚いた。俺はまたマクワウリでもぶら提げているのかと思つた。邑中が風呂に入ると、ポツチャン、ポツチャン、ポツチャンだものナ」

三人は大学二年の夏休みに、誘い合つて、一ヶ月ほど北海道旅行をしたことがあつた。

「そうそう、特に最後の音がデカイんだよなあ。さすがのわしも、これだけは黙つて頭を下げさしてもらうわ」

「いやいや、先に風呂に入っていたオヤジがよ、くくっ……、鼻っ先に邑中の巨大な逸物を突きつけられて、目を剥いてたな。今思い出しても笑つちまうよ。くくく……」

「またあゝ、峪口までえ」

とは言いながらも、なにか誇らしげな邑中であつた。

「ははっ…、わりい、わりい。でも、検査のあとの対応はずいぶん良くなったよ」

「そうそう、ほんとうに横柄だった」

「そういえば俺、前に眼鏡用の小さなドライバーを取られたことがあるんだ。五センチぐらいのやつだよ。一緒にいた中国人スタッフが、“これでいったいなにができるんだ、ハイジャックでもすると思うのか”って食い下がってくれたけど、規則だ、規則だの一点張りで、とうとう返してくれなかった」

「自分が欲しかったんじゃないの、それって」

「たぶんナ」

待合室はたくさんのお客で溢れており、その喧しいこと、喧しいこと……。

「ほんとに中国人はうるせえなあ」

と言つて、施川は耳を塞ぐ仕草をした。

「まあな。慣れたよ、俺は」

「六年もいれば慣れんべえ。白人もいつぺえ（多い）いる。半分ぐれえいるべえ。中国人に負けず劣らず、うるせえなあ。まるで農協の団体旅行と同じだんべえよお」

と、邑中もそれに同意を示した。

峪口は、レディーファストとかなんとか、女性の前ではいい格好をするが、欧米人にも礼儀知らずが多いと常々思っている。

アジア人だからと見下しているのか、たまたま峪口の会社が入っているオフィスビルの白人がそうなのか、乗り合わせたエレベーター内で、辺り構わず大声で話す携帯電話には閉口させられる。

「田舎者だんべえ、きつとよお。ふんでも何語だあ、この連中は？」

と言つ三人も、間違いなく田舎者だ。

「スペイン語か、ポルトガル語だろうな」

などと他愛もない会話をしていると、間もなく搭乗手続きが開始された。

「珍しいね、時間どおりだよ」

「ほら、去年の六月到北京へ行つたじゃない。あのときはなんの放送もなく、この空港で一時間以上待たされたんだ。焦つたよ、二人より少し早く着くはずが、遅れるんじゃないかと心配で……」

「そうそう、でもむしろ遅れて、結果的に空港でピタリと遭えたんだよな」

「うんだうんだ。どっかのバカが遅れてきたんだあ」

そのときのことを思い出したのか、邑中が憤懣やるかたないといった表情をした。

飛行機まではバスでの移動、その運転の荒いこと荒いこと。途中で何度か急ブレーキを踏まれ、その度に乗客からは嬌声があがった。

「いてえっ！ わざとじゃねえか、まったく」

よろけた拍子に、バスの壁に頭を強か打ちつけた施川が、怒りの声を発した。

「まあーったく、わしのヘッドはクッションなし、地肌に直にぶつかるんだからな」

と言つて、薄くなった頭を撫ぜあげた。

「これかなあ、いや違うなあ。……あれかなあ、またまた違う。いったいどこまで行くんだよ」

峪口もイライラを露にした。

空港内に駐機している飛行機の間をバスは縫うように進む。

その度に乗客の身体は左右に傾ぎ、嬌声があがった。

そうして、ようやくバスは止まった。

「峪口い〜。この飛行機、でえじよぶかあ？ ちっちえ（小さい）し、小汚ねえしよお……」

邑中が不安そうに訊いた。

「それは、私にも補償できませ〜ん。ここまできたら諦めるよ」

「うんだなあ。白人が多いから、でえじよぶだんべえ」

邑中が自らに言い聞かせるように呟いた。

「どうゆう基準だ、それって？」

飛行機は、定刻よりも十分ほど早く飛び立った。

「峪口い時間前だよ。驚いたね、どうも。定刻より早く出発するなんて、日本じゃ考えられねえな」

「全員揃ったんだべえ。いいべ、遅れるよつかよお」

平行飛行に移っても、乱気流の所為か、機体が小さいからか、激しく揺れを繰り返していたが、十分ほどしてようやく静まった。

「おっ！一応ドリンクサービスがあるんだ。飯も出るのか？」

「簡単なものが出るはずだよ」

三十分ほどが経過し、

「おっ、来た、来た。綺麗なスチュワーデスだなあ。峪口い、わしやビール二本じゃ」

「ないよ。ジュースでいいだろう？」

「俺あはジュースでいいだ。オメエもそうしろ」

なんだビールはないのかと、ブツブツ呟きながらジュースに口をつけた施川が、

「なんだ、このジュース。まるで砂糖水だ」

「文句を言わないの」

「こらあーッ！急に椅子を倒すな。まったく頭にくるなあ」と叫んで、施川は椅子の背をバンと叩いた。

見ると、零れたジュースがシャツを濡らしている。

「おい、施川あゝ。止めるおゝ、喧嘩すんなよおゝ」と邑中が必死にな駄目ている。

「ほら、前の奴、睨んでいるぞ」

峪口が囁くと、

「文句あるのか、この野郎ッ！表に出ろッ！……なんてネ」と、施川は表情を崩して見せたが、目は笑っていない。

「よせよおゝ、施川あゝ。周りの連中がこっち見てンベよおゝ」

再び邑中が不安げに囁いた。

「すいません、の一言が言えんのか、ったく。飛行機降りたら勝負するぞ」

施川の怒りの大きさを感じたのか、前の乗客は慌てて椅子の背を元に戻した。

「そうだよ、それでいいんだよ。最初から素直にやりやいいモンを……」

と、ようやく施川は怒りの矛先を納めた。

「食べ物の恨みは恐ろしいとゆうが、施川の場合は、ビールの恨みが一番恐ろしいな」

「ふんとだ、俺あちの太郎と同じだあ。餌食つてつとき、うっかり手え出すと喰い付かれっかなあ。うん、氣いつけんべえ」

「なんじゃあ、わしは犬つころと一緒にか」

「うんにやあ、太郎はかわいいけれど、オメエは……」

「かわいいけれど、なんだあ？」

「へっへ……、言わねえ方がよかんべえ」

「おい、施川。飯が来たぞ。どっちにする？ 飯か麺だってけど。」

邑中、オメエはどっち？」

「わしはライスとビール。邑中は麺にしる。不味かったら交換じゃ」

「ビールはねえってゆってんべえよあ。まあ、ったく、調子いいんだかなあ」

麺はきし麺状の麺に肉の入った汁を絡めもの、ライスはマーボ豆腐で、どちらにも漬物が二種類添えられている。麺もライスも一応温かかった。

「施川あ。けえんべえ（交換しよう）」

「嫌じゃ、そっちも不味そうだから」

三、豚に真珠、ハゲにドライヤー

飛行機は二時間半ほどを要して、どうやら無事に桂林空港に着陸した。

施川はタラップを降りると、大きな深呼吸をしながら言った。

「は〜あ……。それにしても暑いなあ。しかし田舎にしては、中々立派な空港だ」

「俺あ長袖だからあぢい、あぢい。施川に訊いたらよお、日本と同じくれえだつてゆうモンだから、半袖なんか持ってきてねえべよお。どおすんだよお」

「国際的な観光地だからナ、桂林は。施川あ〜、メールで入れといたろう。邑中に連絡しなかったのか？」

「中国は外面がいいか。あれ、連絡しなかったかあ」

「これだもん、どつかで買うべえ。峪口い〜、それはいいけど、このツアーは現地集合なんだべえ。どこへ集まんだあ？」

邑中が不安そうな顔を峪口に向けた。

「待て待て、この説明書によるとだ。出迎えロビーに添乗員がいるはずなんだが……」

虹橋空港で乗るときには、外人はパスポート、中国人は身分証明書
の提示を求められたが、桂林空港では荷物の引換券のチェックだけ
だった。出口で担当者が、荷物に付けられた半券と手持ちの半券と
を照合している。

狭いロビーには、旅行社の旗を掲げた添乗員が数十名待っている。

「うへえ。峪口い、どれだよお〜。大丈夫かあ？」

「熊ちゃん、豚ちゃん、豚熊ちゃん。心配せんと、峪口君に任せて
おきんしゃい。わしやは売店でビールでも買って来るけんネ」

「どこの生まれだオメエは……。施川あ〜、あんまりウロチヨロシ
ねえ方がいいどお」

「なあ〜に、大丈夫だ。売店はあそこだから、わしを置いていくな
よ」

「おおつ、あれだあれだ。あの旗、CITS旅行社。おい、施川ちよつと待て、離れるな」

「ん……、かわいい娘じゃん」

施川には、女性は全てかわいらしく見えるようだ。

「おい施川、急ごう。置いてかれちゃかなわんぞ」

「ほれ、施川あゝ。早くう、早くう」

邑中は全てにおいて慎重な男だ。面倒見もいい。

峪口は到着を添乗員に告げ、バッチと帽子を三個ずつ受け取って、二人の所に戻った。

「あれ、施川は？」

「まあゝつたく、駄目だよゝつて、ゆつてんのに、ビール買いに引っちゃうんだもん。あの、バアタレ」

「そうか、しょうがねえなあ……。おつ、戻って来た」

施川がなにやら袋をぶら下げて戻って来る。

「おい、急げ。みんな揃っているぞうだ。ほら、ほんとうに置いてくぞ」

「ほおゝれ、施川あゝ。早くう、早くう」

添乗員の掲げる旗の下に、十数名の旅行者が集まっている。

2

「この人たちと一緒に旅行するの？」

施川はビールを飲みながら訊いた。

「そうみたいだ。ほら、バッチと帽子」

「おう、あんがと。バッチはいいけど、この帽子はなんとかなんなのよ」

「ブツブツゆうなよ。みんな同じものをつけているだろう。アンタが一番迷子になりやすいんだから、しっかり被つとけよ。ほら、もう行くぞ」

「へへへへ……、オメエが一番危ねえんだと」

「あれ、熊の帽子とわしのはサイズが違うのか？ どれどれ……」
施川が邑中の帽子を取って自分の頭に乘せた。

「どうみても同じだよな」

再び邑中に被せて、

「おうおう、なんちゆうデカイ頭じゃ。くくくっ…、半分も入らねえ」

「オメエと違ってよお、脳ミソがいつぺえ詰まってんだあ」

「へへっ…、糠ミソだろう」

「あれ、施川あゝ、頭にカビ生えてっど」

「おっ、早速のお返しか。これはカビじゃねえ、産毛じゃ」

「へへへっ…、産毛だとお。どれ、吹けば飛ぶんじゃねえかあ」

「こら、止める。息を吹っかけんじゃねえ。大切に育てているんだからよお。まったく、なんの苦勞もねえモンだから黒々とさせやがっつて。筆るぞ」

「あつ、止めれ、止めれ」

「ほら、二人とも、行くぞ」

十数名の同行者と共に三人は、添乗員の導きにしたがい用意されたバスに乗り込んだ。

空はあくまでも青く、空気は澄み渡っている。

上海から二時間半、千キロばかり南に移動したことになる。ほぼ台湾と同緯度で、香港からは少し北西に位置する。

十月とはいえ暑い。

「なんだって？ なんだって？」

「うん、今日の日程と明日の集合時間を説明しているんだよ」

「へーえ。オメエわかんた」

「まあ、だいたいな。でも、訛りが強くてよくわからないところもある。後で紙に書いてもらっよ」

「オメエだけが頼りなんだからよお。施川じゃ、クソの足しにもなんねえしなあ」

「あらあゝ、邑ちゃん。ゆっくりくれるじゃないのお」

施川は既に二本目のビールを飲んでいる。

「おい、あんまり飲み過ぎるなよ。ところで、今何時？」

「五時を少し回ったところだ」

邑中が自慢の腕時計で時間を確認した。

「えッ！ 邑中、それって、日本時間だろう。時差が一時間あるんだぞ」

「そうかあ。ふんじゃ、四時か？ 六時か？」

「四時だ、バクカ。時計を一時間戻しなさい。時差もわからなくちゃ、高級時計も役に立たねえな。まさに豚に真珠だな」

施川が口を挟んだ。

「ハゲにドライヤーだんべえ」

「おつ、邑ちゃん、うまいことゆうねえ」

「あんれ、怒んねえのかあ」

「わしは心が広いンじゃ。ところで、これからどうすんだ？ わしはホテルで休みたいンだけど。眠くなってきちゃったよ」

「これだモンなあ。市内観光をして、夕飯食ってからだから、ホテルに着くのは八時過ぎになるぞ」

添乗員は先ほどからしゃべりっぱなしで、そのうちに歌まで唄いだした。

旅に浮かれた同行の中国人たちも大はしゃぎである。

「少し静かにしてくれないかなあ」

施川はトロンとした目を瞬かせて言った。

四、へい、賑やかにやろうぜ！

1

「おい、着いたぞ」

「えッ！ どこ、どこ？ ホテル？」

まどろみから目覚めた施川は、

「あゝあ、よく寝た。少し寝たらすつきりしたよ」

と頭を振り振り、首の骨をボキツと鳴らした。

「夕飯だよ。まあゝったく、市内観光の間中寝てるんだからな。いったい、なにをしに来たことやら……」

「だって、別に見るものないじゃん。象の鼻だの邑中のケツだのって……、まあ、そう見えないこともねえけどナ」

「象の鼻山は桂林のシンボルの存在なんだぞ。バカにしちゃいけませんよ」

「ふんだ。近くで見つと、なかなかよかったぞおー。ゾォー」

「施川、聴いてやれよ。珍しく洒落をゆっているようだから、邑ちやんが」

「ふゝん、そうなのお。えかったね、邑ちゃん。シンボルねえ…まあ、そう言われると、なんとなく有り難味が増すわ。わしは遠くからチラツと見たから満足、満足」

「オメエはなんしに来たんだべえ。この横着モンがあ」
到着したレストランは、ツアーには付きものの大食堂である。

十人掛けの円卓が数十卓、峪口たちのツアー一向には二つのテーブルが割り当てられ、好きな所に座れとのことであった。

しかし、二組の家族が一卓を占領してしまったので、三人は残った卓の隙間に辛うじて尻を割り込ませた。

「わしらの他は二組の家族とアベックが二組、それと女性の一人旅か。峪口い、あの女性はなんだるな？」

施川が声を潜めて囁きかけた。

「おい、施川。あんまりジロジロ見るなよ」
と峪口が耳打ちをした。

「そうはいつでも気になるじゃん。後で話し掛けてみようよ」
コソコソと囁き合う二人に、

「駄目だよお。止めるよお」
と邑中が情けない声をあげた。

隣の円卓にはビールが運ばれ、気心の知れた家族同士のため大いに盛り上がっている。

比べて、こちらの混成部隊は静かなものである。

すると施川が、

「ビールは自分で頼むのか、なるほど。旅行費用には入ってないんだな。峪口、五、六本頼んでよ」

「ごっ、五、六本？」

「ああ、みんなに奢りさ。挨拶代わりによ」

「おっ、珍しいこともあるモンだ。ケチンボの施川の奢りとはよお。雪でも降んねければいいけんどお」

と言う邑中に向かって、

「がっはははは……、三人で割り勘、なっ」

「x・・・・……!？」

2

ビールが届くと、施川は早速一人旅の女性に近づきビールを勧めたが、その女性にはこやかに微笑みながらも拒絶している様子だ。

なおもしつこく勧める施川に、女性は助けを求めるような視線を峪口に向けた。峪口は施川に席へ戻るようにと目で促がした。

頭を掻き掻き席へ戻る施川に、

「施川あゝ。ここは日本じゃねえんだから、止めるよあゝ。ふんとな、いやーな顔をしていたぞあゝ」

と邑中が諭した。

「独りぼっちで寂しそうだったから、励まそうと思ったんだけどなあ……」

決してスケベ心からではないと、強調したらしい。

「ほらほら、施川。正面の女性がグラスを突き出してるぞ。ビール注いでやれよ。隣の彼氏にもナ」

「おっ、いいね、いいね。どうぞどうぞ。あっ、男は駄目ネ。へへ

へっ…、冗談、冗談、どうぞ。こっちもお隣に負けないうように楽しくやりましょうよ。はい、御隣さんも」

施川は同じテーブルの人たちに、次々とビールを注いで廻った。気の良い男ではある。

「ほら、邑中も飲めよ。今日は、少しはいいだろう。なあ？」

「す、少しナ。ちつとでいいぞ。俺あ、直ぐ真っ赤なっちゃうべよあ〜」

「いいよ、真っ赤でも、真っ黒でも。いいから、もう少し飲めよ、ほれ」

「こんで十分だあ。もったいねえからよあ。もういいってばあ〜」

「ごつつい身体して、ほんとにだらしねえな。バケツで飲みそうな面しやがって」

「俺あ酒飲むと、直ぐに眠くなっちゃうんだあ」

邑中はアルコール類をほとんど飲まなかった。

「それにしても、誰からもご返杯がないね」

とブツブツ不満を言いながら、施川は席に座った。

「施川、こっちじゃナ、日本みたいに注いたり注がれたりしないんだ。だいたいな、いちいち立ち上がって行かなくともいいの。ビールを卓にドンと置いて、どうぞご自由にやってください、と言えばいいんだよ」

「それじゃ、なにか物足りないな」

「よしよし、ふんじゃ、俺あが注いでやるべえ。ほれ、飲め」

「謝謝、あんがとさん。まさか、熊にビールをついてもらうとは思わなかったよ」

瀬川はグビツと一息に飲み干した。

「じゃあ、俺も。ほら」

「おっ、峪口君まで。すまんの、お、謝謝」

そしてもう一度グビツと飲み干した。

「ほら、邑ちゃん。ご返杯ご返杯」

「いいってばよあ〜。俺あもう十分だあ〜。もったいねえから、い

いってばあゝ」

3

そうしている間にも料理は大皿でドンドン運び込まれ、テーブルに並べられていった。

「施川、ちよつと待てっ！ 洗ってからだ」

峪口は、テーブルに置かれている急須の熱いお茶を茶碗に注ぎ、箸やレンゲを洗ってから、そのお茶をクルクルと回して茶碗を洗うと、空いている器に捨てた。

「これでオツケイ。まあ、気休めだけどね」

「なるほど、生活の知恵だな。よし、わしも」

「ふんじゃあ、俺あもやるべえ。こうかあ？」

「そうそう、こういう店は碌に洗ってないということもあるけど、なんといつでも肝炎が怖いからな」

「そういえば、他の客もみんな同じことしているわ」

「うんだなあ」

「アルコールをしみ込ませた携帯用ナプキンも売られているけど、そこまでやると、ちよつと嫌味だろう」

「肝炎って、そんなに多いのかあ？」

「ああ、多いよ。俺の知り合いの駐在員が二人も罹ったからね」

「ど、どうなんだあ、も、もし罹つとよあ？」

「隔離される」

「か、かくりいー！ 俺あ、やだあー！」

「俺あ、嫌だといってもなあ……。峪口、どのくらい隔離されるんだい？」

「そうさなあ……。二ヶ月は隔離されるんじゃないかな。二人から入院中の話を聞いたけど、かなりきつかったそうだよ」

「んだべなあ」

「隔離の場所はどこななの？」

「上海の郊外ってゆっていたな。日本人だからって特別扱いは一切なし、食事も中国人と同じだったそうだ」

「二ヶ月もか、たまんねえべえ、そりゃ。日本へけえっちゃ（帰る）いけねえのかあ？」

「ああ、よつほどのコネがないと駄目らしいよ」

「喰うの止めんべえ」

頼りなげに言う邑中に、

「わしは喰う。死ぬときは死ぬ」

「まあ、た、ふんなことゆってよお。バカは気楽でいいなあ」

「誰がバカじゃ」

「一番参ったのは食事よりも、なんにもすることがないってことだつて。肝炎の治療方法はただ寝ているだけだからな」

「へへえ、くわばら、くわばら。なんか食欲がなくなってきたよ」と言いつつ施川は、並べられた料理に次々と箸をつけていった。

4

「施川あゝ、オメエゝ、すんげえ食欲だなあゝ」

大きな皿に山盛りされたご飯と川海苔の入ったスープ、キュウリと豚肉の炒め物、カボチャと鶏肉の炒め物、マーボ豆腐、ベロベロの牛肉の炒め物、そして川魚の蒸し物、味付けはどれも同じようなもので、澱粉でトロミがつけられていた。

「マーボ豆腐以外はみんな同じ味付けじゃん。この魚なんか焼いて欲しいよ。これ、桂魚ってやつだろう？」

「いや違うな。なんだろなあ？ 鯉とも違うし、草魚かな？」

「泥臭くないし、まあ不味くわないけど、やたら骨が多くて……」

うん？ 峪口いゝ。これ、これ見てくれ。骨が二股にわかれて、ものすげえ鋭い。こんなのが喉に刺さったら、病院に行かないと取れないぞ」

施川は口から骨を取り出し、峪口と邑中にかざして見せた。

「おおつ、凄い。大切に仕舞っておきなさい」

「俺あはもういいだ。ご馳走様あくだ」

と言つて、邑中は箸を置いた。

「この牛肉は異常に柔らかいな。薬づけだぞこれは。峪口、これは喰わない方がいいぞ。邑ちゃん、アンタは大丈夫だ」

「あんでえ？ 俺あだつて喰いたくねえべよお」

「そうナンだ、上海でも異常に柔らかい牛肉が出てくるんだ。俺は喰わないけどね」

「うちの会社の添加剤を使えばいいのによお。味もいいし、健康的だし……。うちの社長は絶対に肉は喰わないけどね」

「田原社長は菜食主義かい？」

「いやっ！ 菜食主義つてわけじゃないけど、とにかく動物は喰わない方がいいんだとさ」

「魚は食うんだろ？」

「うん、魚はね。人間とまったく種が違うからいいんだとさ。種の近い牛や豚を喰うから、最近わけの分からない病気が流行るんだ、つて言っているよ」

「ふう〜ん。そうゆうモンかねえ……」

一時間ほどで夕食が済み、バスは桂林市内のホテルへ向かった。

「それにしても桂林てここは、川が多いなあ」

「ああ、川と湖の街だよ。両江四湖、二つの江、つまり川と四つの湖に囲まれている、という意味だつて」

「よく知つてんなあ〜、峪口はよお」

邑中が、いかにも感心したという風に呟いた。

「空港に置いてあつた、これに書いてある」

「なあ〜んだ。ふんなことだんべえ」

五、どこが四つ星ホテルじゃ！

レストランから小一時間ほどで、バスはホテルに到着した。

市内の目抜き通りにしては少し寂しいが、とにかくここが桂林市の目抜き通りだ、と添乗員が言い張る道路脇に“桂林大飯店”^{ホテル}は建っていた。

「これかあ……、まるでビジネスホテルだな」

桂林が一望できるホテルを期待していた峪口は、失望を禁じ得なかった。

「きつたねえなあ。峪口いゝ、ほんとに四ツ星ホテルかあ？ こんならは江戸屋旅館の方が、まだましだんべえ。知ってつか、オメエら？」

「知るかあ」

「旅行案内には、確かに四ツ星クラスって書いてあるんだけどなあ

……」

「うん、クラス？」

峪口が添乗員に確認すると、

『三人の部屋は特別室にしようと思いましたが、残念ながら今日は空きがありません』

との答えが返ってきた。

「なんだべえ。うんめえことゆって、ごまかしだんべえ」

「そうだんべえ、そうだんべえ」

邑中と施川が不満を漏らすのを峪口は、

「中国の旅は、こんなものさ」と慰めた。

チエックインを済ませシャワーを浴びてから、三人は市内観光に出かけることにした。

ホテルの前でタクシーを拾い、添乗員お勧めの木龍湖へと向かった。湖畔は、グリーンやピンクの光で煌びやかにライトアップされており、色の不自然さはあるものの、中々の雰囲気醸し出していた。気候も良く、連休中ということもあり、湖畔は観光客と地元の人たちで賑わいを見せていた。

「ほほう、綺麗だなあ。雰囲気もいいし、でも隣が峪口と邑中じやあ、ちよつと興ざめだけどなあ」

「それは悪うございました。スナックASOKOの小百合ちゃんなら良かったか」

「えっ！ な、なんで知っているの、ちみたちが？ によ、女房に内緒な」

恐妻家でもある。

「ははははっ…、自分でベラベラ喋ったじゃないか」

「誰だあ、サユリちゃんてえ？ どうせ、駅の近くの小汚ねえスナックだんべえ」

「人畜無害がわしの売りナンだから、誤解されるようなこと言っちゃ駄目よお、峪口君。…：な、なんだあー！ 小汚ねえだあ。邑中、表へ出るっ！ なんちゃって」

一時間ほど湖畔を散策してホテルへ戻り、明日の朝が早いということから、峪口と施川は缶ビールを一缶ずつ空けて、九時過ぎにはベッドに潜り込んでいた。

ただでさえ狭いツインの部屋にベッドが三つ、デカイ男三人にはかなり狭かった。

第三章 太陽は最高の画家だ

一、時間を守る中国人なんていやしねえよ！

1

桂林の二日目、やはりいつもと同じように四時半に目が覚めた。

施川と邑中はまだ寝息を立てているので、テレビを点けるわけにも
いかない。

かといって、狭いホテルの部屋では、行動も限られ、なにもするこ
とがない。

ああ、失敗した。別々の部屋にすればよかった。

と後悔してみても始まらない。

そこで峪口は、そつと部屋を抜け出し、ホテルの周りを散策するこ
とにした。

さすがにまだ早朝なので、時々車が行き交う程度で、街中は静かな
ものだった。

峪口は、ホテル前の道路を東に向かって歩き出した。

空を見上げると満天の星、上海の百万倍の星が瞬いている。

三十分、二キロほど歩いたか、そろそろ街が目覚め始めたらしく、
車の量が増えてきた。

東の空が少し茜色に色づく、星はドンドン消えていく。

やがて東の地平線が真っ赤に燃え出した。

中空にある太陽の動きはあまり早く感じないが、地平線に顔を出し
た太陽が上昇するスピードは想像以上に速い。

あつと言つ間に、夜の帳を開けていく。

しばらくすると、峪口も街並みと一緒に黄金色に包まれた。

やがて太陽が顔を出し切ると、景色は百万色に色づけされる。

太陽は最高の画家だ。

描いた絵を刻一刻と変えてゆく。

毎日毎日、何十億年もそれを繰り返している。

一秒たりとも同じ絵はない。ゴッホやレンブラントが東になっても敵わない。

東から西に向かつて放射状の雲が扇を広げていた。

峪口は太陽の光を全身に浴びながら進んで行く。

光と影、陽と陰のコントラストが美しい。

太陽は生命力の源、生きとし生けるもの全てに、それを均等に分かち与えている。辺りはすっかり明るくなり、いつしか道路は車で溢れ出していた。

少し遠くへ来過ぎたか……、二人もそろそろ目覚めたるう。

峪口はホテルに向つて帰路を急いだ。

2

掛け布団を飛ばし大の字に寝ている施川のハゲ頭を張り飛ばし、ベッドの下で枕を抱いて寝ている邑中のケツを蹴飛ばした。

「いてッ！」

「いでえッ！ 誰だあ、俺あの飯、取んのわッ！」

「なに寝ぼけているんだ。ほれ、二人とも起きろッ！ 朝飯の時間がなくなるぞ。邑中、オマエ、ベッドから落つこちたのか？」

「オメエらのイビキがうるさくてよお。オメエらすんげえなあ、両方からだもん、まるでステレオだんべえよお」

「それで下へ寝たのかあ。いや、悪かったなあ。おい、施川、ほれ、そろそろ起きろ」

峪口はもう一度ハゲ頭をピシヤリとたたいた。

「あつ、俺あもやんべえ」

「いてっ、こらあーッ！ オマエらいい加減にせんかい。他人様の頭をペツタンペツタン、引つ叩くんじゃねえ」

「なあ〜んだ、起きてんのかあ。つまんねえ。ほれ、もう一発、ハ

「ゲ頭、ぶっ叩かせる」

「あつ、邑中、この野郎。どさくさに紛れやがって……。ところで、今何時だあ？」

「七時だ。集合はロビーに八時だから、もうあんまり時間がねえぞ。ほれ、もたもたしてつと飯抜きだぞ」

「もう一泊このホテルだったよな？」

「ああ、そうだ。貴重品だけ持ってけばいいよ」

「峪口い、オマエ先に洗面しろよ。あれ、邑中は？」

「便所」

「ウンコか、どうりで臭いと思った」

と、施川は冷蔵庫から買い置きの水を取り出した。

三人は身支度を整え、七時半に二階のレストランへと向かった。

既に同行者の幾人かは賑やかに朝食をとっていて、端の方に添乗員とバスの運転手の顔も見える。

峪口たちに気づいた添乗員が近づいて来て、

「昨晚は良くお休みになりましたか？」

と訊いてきた。そして、添乗員はバイキング方式の朝食について説

明してから、

「八時、ロビーに集合ですよ」

と、念押しをすると席に戻って行った。

3

「期待してなかったけど、料理、けっこういろいろあるじゃない」

「んだなあ、昨日の晩飯より豪華だんべえ。俺あ、あんまり喰わなかつたんべえ、うんだから腹あ減ったあ」

施川も邑中も豊富な料理にご満悦である。

「おつ、それ美味そうだな」

施川が峪口の料理に興味を示した。

「なんだあ、どれだあ？」

「この辺りの名物らしいから、喰ってみるよ、この麺。美味しいよ。この上に乗せるインゲンの酢漬け、ちよつと辛めだけど、酸っぱさがアクセントになって、なかなかの味だ」

「なあ〜んだ、素麺みてえのに、インゲン豆乗っけただけかあ…」

「はいはい。君はなんでも、好きなものを取ってきなさい」

「米の粉の麺だね、これは」

峪口は以前上海で食べたとき、この漬物は酢漬けだと思ったが、昼食時に会社の従業員から、これは塩だけで漬けるのだと聞かされて驚いた。

甕の中に、家々に代々伝わる醗酵した汁があつて、そこに塩だけを加え、野菜を漬け込むと、やがて酸っぱい漬物ができるそうだ。

「わしも喰おう。まだ少し時間あるよな？」

「俺ぁいいわ。いつも喰つてっから家で」

「じゃあ、邑中君は月餅を食べてみなさい。明日は中秋節、縁起ものだ。辛党の施川さんには甘すぎると思うけどね」

「月餅？ 月餅ってあれだんべ、中村屋。俺ぁ、あそこでバイトしたことあんど。どこだあ、どこにある？」

邑中は酒を飲まない分、甘い物には目がない。

急いで朝食を済ませた三人が集合場所のロビーに行くと、ツアーの同行者たちはまだ半数も集まっていなかった。

おまけに観光バスも、まだだという。

「こんなものさ。時間通りに集まる中国人なんていやしない。まあ、金でもやるってゆえば別だけど。おっ、邑中、うまいか？」

見ると邑中の手には月餅が握られている。

「うんめえ〜」

「アンタは山羊か」

まだ八時だというのに、表に出ると太陽がカーツと照りつけてきた。今日も暑くなりそうだ。

「あれはなんだろな？」

施川がホテルの脇の方で営業をしている屋台を目ざとく見つけた。

「ん？ ……なんだろう？」

「なんだべえ？」

「子供たちが並んで待っているよ。ちょっと見てみるか」

「うんだなあ、見てみんべえ」

三人は興味深げに屋台へと向かった。

「ふーん、チマキみてえだなあ」

黄、紫、紅などいろいろな色の粉を、蒸したもち米で包んで、それをもう一度蒸しているようだ。

「どう、美味しい？」

施川は隣で頬張っている子供に日本語で話しかけた。当然、子供はキョトンとした顔をしている。

「施川あゝ、中国語じゃねえと駄目だんべえ。へへへ……」

「なるほど、あの色のついた粉が餡のようになるんだ。オハギみたいなものかな？」

「おい峪口いゝ。うんまそうだから、買ってみんべえ。ほれ、錢。

これで足りんべえ？」

と言って、邑中は百元札を差し出した。

「そうだな買ってみるか。いいよ金は。……えッ！ 五角」

「五角つてなあ、いくらだあ？」

「一元（十五円）の半分、しかも三個もくれたよ。三個で五角、これで儲かるかねえ？」

「ふんとかよあゝ？」

「ああ、ふんとだよあゝ。やっぱりこの辺りは、上海とじゃ金の価値が違うなあ」

「そういえば昨日、タクシー初乗り料金も七元じゃなかった？ うん、あれはわしの奢りでいいよ」

施川が領収書を取り出し、ヒラヒラさせながら言った。

「おつ、さあゝすが、太つ腹あゝ。上海は十一元。なんでも安いねえ、桂林は」

「オメエ、要求してンじゃあんめえ」

「あらあゝ、わかつたあ？ どおーれ……」

「ほら、邑中も一個」

「あんがと、……」

「……、邑ちゃん、わしのやろつか？」

「俺のも、どう？」

「いんねえ」

ひと口頬張った三人は、互いに顔を見合わせてニヤリと笑った。

二、七星公園のパンダは世界最高齢？

1

十五分遅れで観光バスが到着。

最後のツアー同行者が乗り込んだときには、既に予定の刻限を十分ほど過ぎていた。

それでも誰も苦情をいう者はいないし、遅れた本人たちも謝るでもなく、当然顔でバスに乗り込んで来る。

「こつちの人たちは遅れても謝らねえんだな。腹立つなあ。ほれ、そこのアベック。グズグズしてねえで早く乗れよ。ったくもう……」

「施川あゝ、郷に入つては郷にしたがえってゆうべえ。カッカすんじゃねえよ。のーんびり行くべえ」

ヒゲが真つ黒に伸びた顎を擦りながら、邑中が諭すように言った。昨日からヒゲを当たっていないようだ。

施川もヒゲは濃い、邑中のそれは中東の人たちのように濃かった。やがて観光バスは動き出し、添乗員がその日のスケジュールを、例によって喧しく説明し始めた。

それによると、今日も桂林市内の観光がメインとのことであった。

「今日は市内観光と水晶館へ行くそうだ」

「なんだよお、スイショウカンののはよお？」

「ほら、山梨とかへ旅行に行くと、大概水晶の加工場に連れて行かれるじゃない。あれと同じようなモンだと思うよ」

「お土産かあ、添乗員の余禄だな。わしはいいわ、買うつもりもねえし」

「とはゆつてもなあ……」

「水晶か……、俺あ行ってみてえなあ。なんか、良い物あんべえ」

「母ちゃんに土産か？」

「うんだあ。なんか買ってけえんねえ（帰えらない）と。施川、オメエもなんか買え」

「そんなモン買って帰ったら、わし、母ちゃんと娘にバカにされるわ」

「まあ、まあ、それは行ってからということ。最初は七星公園だつて……。おつ、もう着いたようだ。速いな。さあ、降りよう」

ホテルから十分ほどで最初の目的地、七星公園に着いた。

七つの峰が連なり、またそれが北斗七星と配置が似ているということから、七星公園と名づけられたそうである。

「公園？」

「そう、公園。桂林で一番大きな総合公園だつて、さっ」

三人が降りようとすると、他のお客が添乗員となにやら揉めだした。

「どうした、どうした？」

揉めごとの好きな施川が覗き込む。

2

「バスに荷物を置いてはいけない、とか言っているな。全部持って降りろつて」

「と言われても、わしは元々身ひとつじゃけん」

「オメエは他人のを持ってくな」

「わしゃ盗人か。おやおや、あのおじさん、水だけでも五、六本は持っているぞ。しかも果物も、バカデカイミカンだ。……文旦かな？ ほら、お兄さん、あんたの親父だろうが、持ってやれよ」

「このバスはチェンジするらしいよ。いいから俺たちは降りよう、降りよう」

峪口は二人を促がしバスから降りて大きな伸びをした。そしてタバコに火を点けた。

「オメエはとうとうタバコを本格的に始めちゃったなあ。止めた方がいいぞ。わしは止めてもう三十年じゃ、結婚した年に止めたんだ」
施川は真顔で、ぼそりと言った。

「ああ、俺も二十年以上止めていたんだけど、こっちに駐在してから、なにかとストレスが多くてねえ」

「大阪か？ どうしようもねえな、あいつら。テメエたちの会社は、しよっちゆう問題を起こしているくせによ」

「うん……、まあ、それももう少しの辛抱だ」
「なんだよお、なんの話だあ？」

峪口と施川はよくメールでやり取りをしているので、施川は上海の状況も知っていた。

「いいの。邑中君には関係のない話なの」

「なんだよお、仲間外れかよお」
邑中が不満気に言った。

「受けた義理と仇はきつちりと返さないとなあ、峪口い」

「そうゆうこと。……義いゝ理いゝと人情ゝを秤にかけりゃ、とくらあ」

「いよッ！ 健さん」

峪口と施川は学生時代、授業をサボってよく東映の任侠シリーズを見に行った。

トイレのすえた臭いが漂う高田馬場の映画館で、三本立てが三、四百円だった。

ようやくゴタゴタが片付いた様子で、全員が荷物を抱えてバスから降りて来た。

まだ、ブツブツ言っている者もいる。

「『そんなに仰るなら、私が全部持つわッ！』だって、とうとう添乗員が切れたよ」

「あの大男、大した荷物も持っていないのにネチネチとしつこいねえ。あのおじさんを見習いなさい。バカモノめっ！」

とおどけて言つて、施川は自らブツと吹き出した。

3

添乗員から入場券を受け取り、約五百年前に架けられたという花橋を渡り、三人は公園に足を踏み入れた。

橋の下を流れる川は清く澄んでいて、上から見ると浅い川底に生い茂る藻や小石、小魚までが良く見える。

「いやあー、それにしても熱いなあ。ビールでも売ってねえかな」などとブツブツ言いながら、施川は売店を目ざとく見つけビールを買いに走った。

「まったく、朝から、好きだねえ。あんたも……」

と言う峪口には缶ビールを、邑中には水をそれぞれ渡した。

「おっ、わりいなあ」

「それにしても、なんだあ、この公園は。まるで昔のユネスコ村じやねえか」

「ユネスコ村はよかつたな。ところで施川、邑中。ほらあの建物、崖に包み込まれるように建っているだろう」

「うん、あれがどうかしたかあ？」

「なんでも千数百年を経ているんだそうだ」

峪口はプルトップをプシュッと開けて、ビールに口をつけた。

「へーえ、ほんとかねえ……」

施川はあまり興味を示さない。

「これ、空かねえぞお。どおすんべえ？ うつちやる（捨てる）
きかねえかなあ……」

中国製品には、時々なんとしても開封できないペットボトルがある。
その場合は、運が悪かったと諦めるほかはない。

「ほらほら、みんなに追いつこう。あそこで固まって写真を撮って
いるから」

なにやら幾何学模様の彫刻が施された白い壁面が百メートルほど続
き、そこでツアーの同行者たちが他の観光客とともに一生懸命写真
撮影に興じていた。

「これ、なんだべえ？」

「説明書きによるとだ、中国が歴史上発明したといわれているもの
を表しているらしいよ。ええと、……華夏之光広場だって」

峪口はパンフレットで確認しながら二人に解説を加えた。

4

「するとあれだんべえ、火薬とか印刷技術とか、だんべえ？」

「邑中はペットボトルに悪戦苦闘しながら言った。」

「賢いねえ、邑中君は。良く知っているねえ」

「ただのデブじゃねえな」

「中学んとき、勉強したんべえよお。ああ、オメエはやってねえな。
ところで峪口い、あの人間の絵はなんだべえ？ 身体のあつちこ

つちに黒い点があるべえ。……あつ、そうか、ツボだあ」

「ツボ？ ……なあーるへそ」

「施川もようやく興味を示し始めた。」

「そうそう。身体のツボを示しているんだって」

「へーえ。……それにしても、いつまで写真を撮っているんだよ。
早く次へ行こうぜ」

「施川あ、俺あの写真も撮ってくんどお。ほれ、カメラ」

「へいへい、わかりやした。はい、パッチン」

「んもう、ちゃんと撮ってくんどお」

「モデルがわりいから、創作意欲がわかねえ。ほれ、パッチン」
中国人はほんとうに写真が好きである。

しかも撮られる方が一々ポーズを決めるので、一枚撮るのにとても時間がかかる。

それを交代交代でやるものだから、待つ方はイライラが募る。

「施川あ、パンダが見られるとよ。一緒に写真も撮れるってさ」

「パンダねえ……、今じゃ、あまり珍しくもねえな。それに、ここにも珍しいのが一匹いるしよあ。へへへ……」

「うん？ どこだあ？」

邑中が辺りをキョロキョロと見廻した。

「まあ、そうゆわずに。去年まで、世界最高齢のパンダが飼育されていたんだそうだ」

「最高齢？ そんなの、わからないだろう。誰か、中国中の野生パンダに歳を聞いて廻ったのかあ」

「へいへい」

ああいえばこうゆう、施川は寝おきの所為か妙に理屈っぽい。

「ほれ、行くべえ。わけの分かんねえことグダグダゆってねえでよあ。ほれ、行くべえ」

邑中が施川の腕を引っ張る。

「いてえーッ！ わあーったよ、わあーった。バカ力出しやがって」
「駄目だこりゃあ」

邑中は、どうしても開封できないペットボトルをゴミ箱に投げ捨てた。

三、巨大な鍾乳洞と巨大な駱駝^{ラクダ}

添乗員の後について山を少し登ると、やがて大きな穴が口を開けていた。

上から見下ろすと、野球場がすっぽり入るほどの広大な空間が眼下に広がっている。

「その階段を下りろってサ」

三人は促されるままに、狭い怪談を慎重に下りて行った。

「ひよえー、だね。この広さ、半端じゃねえや。わしゃビツクリこいた。ところでここには、なにがあるの？」

「ふんとだあ。ひよえーだ、穴の底に下りつとふんとにデツケエなあ。俺あもビツクラこいた」

「鍾乳洞だつてさ。ほら奥の方へ穴が続いているだろう」

ツアーの添乗員ではなく専任の案内人が、高さが五十メートル以上あるドーム上の天井の所々を、懐中電灯の光で照らしながら説明を始めた。

「ほら、施川、邑中、あそこ。懐中電気で照らしていると、茶色くなっているだろう」

「うん？ あれが？」

「魚の化石だつてよ」

「ふんとかよお……、ずいぶんデツカイベえ」

「まあ、そういわれれば魚の形に見えないこともないけど、ほんとかねえ……？ でも、涼しくていいや、ここは」

「日中友好のためだんべえ、そうゆうことにしておくべえ」

「ははははっ……。邑中、日中友好はいいねえ」

三人は添乗員の後について歩を進めた。

「おーお、確かに鍾乳洞だ。ライトアップされていて綺麗だけど、ほんとうの色がわからねえなあ。ここまでやると、ちよつとやりすぎじゃねえのか」

「ふんなこと、あんめえ。綺麗だんべえよあ」

「君には、ほんとうの美しさというものが分からないのかね。こんな人工的なものを見て感動するなよ」

「施川あゝ、そういえば学生のころにさあ、秋吉台へ行ったじゃない。あれとはスケールがだいぶ違うな」

「あれには感動した。確かにスケールは桁違いだが、こっちは感動がない」

「生ゆつて。鍾乳洞ができんに、どのくれえかかるか、オメエ知つてつかあ？」

「鍾乳石は一センチできるのに、百年かかるって聞いている」

「あんれ、オメエでも知ってるのかあ。なあゝんだ、つまんねえ」

「そんなのはガキでも知っている。それにしても、あんとき峪口の親父さんに喰わせてもらったステーキ、美味かったなあ」

「なんだあ、ステーキってのは？」

「そうか、あんとき邑中はいなかったんだ」

「そうそう、あれは相沢と一緒にだった」

「相沢？ あの相沢かあ？」

「そうだ、修だ。あいつ死んじまったんだよなあ」

「うんだあ。可哀想なことしたなあ」

2

「うん……」

三人はそれぞれの思いを込めて、同級生の死を思い出していた。

湿っぽくなつた雰囲気を振り払うように、峪口はことさら明るく言つた。

「おつ、あれがライオンでこっちが熊か、それであれが葡萄と林檎。えっ！ こっちはペニスだつて」

「ペツ、ペニス！ あのお姐さん、可愛い顔して平然と言うね。意味はわかっているんだろか？ なんならわしのを……」

と施川は、ズボンのチャックを下ろす仕草をした。

「オメエ、警察に捕まっど。恥ずかしいから、止めてける」

「はっははは……。他のお客さんも笑っているから、わかっている

だろうよ」

「まあ、言われてみれば、そう見えないこともないけどね」

「受け狙いだんべえ。どこでも同じだあ」

「ところで峪口いゝ、この穴はどこまで続くの？ もういい加減飽きてきたよ。早く外に出たいんだけど……。蒸し暑くって敵わねえよ」

施川がハンカチで汗を拭った。

「おかしいな、入ったところは涼しかったのになあ。普通、鍾乳洞といえは涼しいはずナンだけど、ここは蒸すねえ」

「おおつ、すんげえ。施川あゝ、写真、写真撮ってくんどお」

「へいへい。ひとり元気だねえ、邑ちゃんは。峪口い、撮ってやってくれ」

「おお、あいよ」

峪口が案内の小姐（女性従業員）に訊くと、天井を指し示しながら、あそこまで登ってそこからもう一度下るので、まだしばらく時間がかかるとの答えが返ってきた。

「あゝあ、ほんとかよお」

峪口は愚痴る施川の歩調に合わせて、観光客の最後尾をダラダラとついて廻った。

邑中はそんな二人にお構いなしで、添乗員についてドンドン先へ行く。

「おお、元気のいいこと。さすがは野蛮人」

小一時間ほどして、

「ふーう、ようやく出口が見えてきた」

と施川は大きなため息をついた。

「今は十時半だから、二時間近く中にいたことになるのか」

峪口が時計を見ながら言つと、

「もうええ、もうええ。もう十分じゃ」

施川が飽き飽きといった表情で言い放つと、

「そおかあゝ、面白かったべえよお」

と、邑中は生き生きとした表情を二人に向けた。

3

「オマエ、穴から出て来ると、まるで野生の熊だな。そのヒゲ、なんとかしろよ。子供が見たらひきつけを起こすぞ」

「なぐにゆってんだあ。オメエのウンコがなげえから、朝、ヒゲ剃る時間がなかったんだんべえよあ」

鍾乳洞を出て山を下ると、見晴らしの良い広場に出る。

そこではたくさんのお客が、正面の駱駝山と名づけられた奇岩を背景に、写真撮影に興じていた。

その山は人の手が加わったのではと思えるほど、ほんとうに駱駝の姿を連想させる。

「いたいた。空港にたくさんいた外人さん、いったいどこへ消えたかと思つたら、こんな所に屯していたのか」

施川が素っ頓狂な声をあげた。

「そうなんだ。さつき、添乗員に文句をゆつたんだ。三泊しかないのに、その内の二日間が市内観光じゃつまらないよ、ってね」

「ああ、そんでさつき添乗員と話してたのかあ。俺あ、またオメエの悪い癖が出たのかと思つたぞあ。で、なんだつてえ？」

「うん。なんでも、桂林市の決まりで、団体ツアーの場合、二日間は市内観光が義務付けられているんだとさ」

「ふつ、ふんとかあ？」

「結局ね、有名な観光地は全部桂林市の外なんだ。観光客が直接そっちへ行っちゃうと、市内にお金が落ちないだろう」

「なあーるほど、そのために無理やり市内に留めておこつて魂胆か。やるね、桂林も」

施川は納得したように呟いたが、

「でも納得できねえなあ。なあ、邑中君？」

「うんだあ。ふんであれかあ、棚田へは行かねえのかあ？」

「ああ、行かねえとよ。なにしろ明後日を入れても一日半、中途半端な観光しかできない。パンフレットを見ると、郊外にたくさん良い所があるのになあ。それにしても邑中、よく棚田とか知ってたな」「俺あだつてオメエ、旅行のめえ（前）には、少しは調べるべよあ。どっかのアホとは違うかなあ」

「わしは細かいことにはこだわらんのじゃ。文句あつか」

「ねえ。峪口いゝ、申し込むとき、わかねかったのかあ？」

「パンフレットに棚田の写真が載っていたから、当然行くものだと思っていたよ。いや、申し訳ない。……ツアーに入らず、個人で来れば良かったかなあ」

「しょうがあんめえ。施川あゝ、文句ゆうなよあ」

「いいって、いいって。わしは酒が飲めれば、観光なんてはどうでもいいのじゃ」

「そうだんべえゝ。オメエは酒飲んでつか、寝てつか、どっちかだんべえよあ」

四、豊彩山（風洞山）からの眺望は山水画

1

駐車場に着くと、朝とは違うバスが既に待機しており、全員を乗せて次の目的地の豊彩山に向かって走り出した。

豊彩山は桂林市の北方に位置し、名月峰、四望山、仙鶴峰、干越山の四つの峰からなっていた。

山腹に風洞があることから風洞山とも呼ばれている。

風洞山の頂からは桂林市内が一望できる。

「こつ、この山、登るわけ？」

施川はうんざりした表情を見せた。愚痴の多い男である。

「そうだよ。頂上に行くと桂林市内が一望できるそうだ」

「早く行くべえ」

「まあーったく、張り切っちゃってよお。単純バカはいいねえ。しやあねえ、付き合ってやるかあ」

「あんだあ。ブチブチとうるせえ男だなあ」

「……蝶の館、なあーんだ、土産売り場じゃねえか」

「通り抜けるだけだよ。ほら、他の連中も土産には目もくれないだろう。こつちも添乗員についてけばいいよ」

「もつとゆつくり行ってくれえ」

「じゃましい。誰だ、早く行くべえってほざいた奴は」

「俺あだ。峪口い、待つてくんどお」

五十メートルほど山道を登ると、やがて風洞と呼ばれる祠の前に出た。そこには観光客がたくさんいて、入れ替わり立ち替わり写真撮影に余念がない。

風洞の向こうから涼しい風が吹き抜けて来て、観光客を癒してくれる。

その祠の壁面には、至る所に詩文が彫られていた。

「施川あゝ、悪りいけど、写真撮ってくんどお」

と邑中がカメラを差し出した。

「あいよ。……ところで峪口い、このジイさんは誰？」

「ええとねえ……。なになに、復旦大学の創設の一人だそうだ」

「フクタン大学？」

「上海でも一、二を争う名門大学だよ」

「へーえ、そうなのお……。ところでみんな座り込んでいるけど、ここで終わりかな？」

施川は例によつて、大した興味も示さない。

「終わりじゃないよ。あつ、そうそう、君の大好きな周麗さんが卒業した大学だ」

「なにッ！ 早く言ってくれ。そうか、周さんが……。なんか、このジイさん、他人のような気がしない。今回は会えないのかあ？」

「寝た子を起こしちゃったか」

「俺あも会いてえ」

2

「ははははっ…、また今度ね。ほら、みんな祠の中に入って行くぞ」「ふんとだあ。んじゃあ、俺あたちも行くべえ。ほれ、施川あ、腰あげろっ」

「まあ、待てよ、邑中。添乗員が動き出してからでいいよ」

祠のあちこちに立ち止まり、その都度添乗員が説明を加え、先へ先へと進んで行くと、少し開けた場所に出た。

そこでは土産物なども売られている。

「峪口いゝ、このTシャツ五元だあ。手描きだんべえ。安いかあ？ ……そおかあ、安いかあ。うん、こっちは扇子か、これも五元かあ。七十円ぐれえのモンだなあ」

「確かに安いと思うけど、質も悪いから。あんまり期待するなよ」

「そおかあ。……んでも、土産にちようどいいべよあ。扇子、買うべえ。峪口いゝ、交渉してくんどお」

「止めとけ、止めとけ。後で後悔するぞ」

施川が制したが、

「うんでも、七十円とは、誰も思わねえべえ。十本ばっかし、もらうべえ。五十元だな、ほれ、百元」

「ちよ、ちよっと待てッ！ 金は仕舞っておけ。金は交渉してからだ」

「いいよあゝ。五十元だんべえ」

「いいから邑中君、ちよっと待ちなさい。わしも北京で経験したけど、峪口先生に任せておきんしゃい」

「どこの言葉じゃ」

峪口は店番の男と交渉を開始した。

「邑中、二十本くれるそうだけど、どうする？」

「あんだあゝ、五十元でかあゝ？」

「ほらな、わしの言ったとおりだろうが……」
「そおくんには、いらねえよお。十本で十分だあ。ふんじゃ、十本なら、二十五元でいいんだんべえ？」
「なんだあ、猫を踏んづぶしたような声だじゃあがって。そうはイカのおチンチンだ」
「邑中あ、施川のゆうとおり、そうはいかないのだ」
「あんでえ？ 二十本で五十元だら、十本で二十五元だんべえ」
邑中は峪口に粘りに粘らせて、とうとう十本、三十元で購入した。
「意外と細かいな。やっぱり銭を残す奴は違うな。ほら、もたもたしているから、みんなはもう上へ行っちゃったぞ」
施川が呆れたとばかりに言ったが、邑中はとても満足らしくニコニコとしている。

3

その場所からは視界が開け、山の麓を流れる川だけでなく、連なる峰々も一望できた。

「へーえ、なかなか綺麗な眺めじゃ。ふうう、風が気持ちいいこと…… それにしても、十月の桂林が、こんなに暑いとは思わなかった。蒸し暑さも凄いねえ。まだまだ真夏だよ、桂林は……」

施川が邑中のお土産から扇子を一本抜き取り、パタパタと扇ぎながら言った。

「考えてみればかなり南なものなあ。直ぐそこはベトナムか、暑いわけだよ」

「ふんとかあ、ベトナムって、峪口い？ …… そうかあ、そう聞いたら、汗が噴き出してきたあ。おい、施川あ、俺あの扇子、汚すなよなあ」

三人はようやく同行者たちに追いついた。

「ふうう、やっと追いついた。あれっ？」

「ああら、もう行っちゃうのね」

そこではまた、記念撮影が繰り広げられていたが、これからもつと良い場所に向かうという添乗員に促がされ、一行は急な斜面を再び登り始めた。

「ほれ、二人とも行くべえ」

「あつ、こいつ、土産買ったら急に元気になりやがつて」

一息つこうとしたが邑中に促され、峪口と施川は渋々同行者たちの後ろにしたがつた。

「ひよえーッ！ こりゃあ疲れるわ。ガソリンはないしなあ……」

施川はビールをガソリン呼ばわりするのが常で、日本で峪口とウオーキングをすると、例えそこが、どんな田舎道でも自動販売機を探し出す。

本人は特殊能力で匂いがするのだと言い張るが、なーに、ただ購入した経験があるだけで、それだけあちらこちらで飲み続けていたということである。

「ほら、水」

峪口は水の入ったペットボトルを施川に投げ渡した。

「おつ、用意がいいねえ。ビールは駄目だ、身体がだるくなるからなあ……」

と施川は自らに言い聞かせるように呟いて、ゴクン、ゴクンと喉を鳴らした。

「ほら、邑中も」

「施川の飲んだやつかあ。オメエ、病気はでえじょうぶかあ？」

「あつ、そう。いらないのね」

傾斜がきつく、三人は汗だくになっていた。

「ふーう、着いた、着いた。やっと頂上に着いた。いやー、絶景かな、絶景かな。それにしても、綺麗な川だなあ……」

「ふんどだ。俺あ、こんな景色、今まで見たことねえ」

本来、この規模の『川』になると中国では『河』とか『江』というが、この旅行記の中では『川』で統一する。

「いいね、いいね。風情があるなあ。ほら、川に浮かんでいる船を見ってみるよ」

「うん？ オメエ、よく見えんなあ……。あれは竹でできてんだんべえ。太い孟宗を五、六本束ねただけだあ」

「妄想？」

「違うべえよお。妄想はオメエの頭ん中だんべえ、エロハゲ。妄想じゃあなくてよお、孟宗竹だんべえ」

「じやかましい。どさくさ紛れに、誰がエロハゲじゃッ！」

「くくくく……。エロハゲねえ。言い得て妙だ」

「あゝあ、峪口までえゝ。それにしても絵になるなあ。あの漁師すつかり景色に溶け込んでいて、まるで山水画だ」

「オメエにしちゃあ、洒落たことゆうなあ」

「そうだな、あれがエンジンつきでカーボン製の船じゃ、様にならねえものなあ」

「峪口いゝ、あれをバツクに一枚頼むよ」

「ほいきた」

「俺あも頼んべえ。このカメラで撮ってくんろう」

「あいよ、わかった。どうだ、施川と撮るか？」

「いんね。峪口、オメエ一緒に撮るべえ。ほれ、施川、撮ってくんぞお」

と邑中がカメラを瀬川に渡した。

「よつしゃあ。あれえ？」

「うんにゃあ、どうした？」

「いや、なーに、大したことじゃねえ。ただ、邑中がどうしても画面からはみ出す」

「三人でも撮るかあ？ 添乗員に頼むから」

「駄目だよおゝ。三人で撮つと、真ん中の人間は早くおつちぬ（死ぬ）べえ。オメエら知んねえのかあゝ？」

「まったく、迷信深い男だなあ。じゃあ、いいや。ほれ、昆中、わしと峪口で撮ってくれ。順番に撮ろう。しかし面倒くせえ男だなあ、オマエさんは……」

「施川あゝ、オメエだって、まだ死にたくあんめえ」

「はいはい。それにしても、吹き抜ける風が気持ちいいなあ。いやー、生き返るなあ」

「漓江、って言うんだ、この川は」

「リージャン？ あれっ、そういえば峪口い、以前もそんな名前言っただけだった？」

「よく覚えていたな。でもあれは『麗江』、雲南省『昆明』の先の方で『シャングリラ』の地名があるところさ。……ピンインはLiで同じだけど、厳密には四声が違う。それに文字も異なるんだ。桂林の漓江の『漓』は滴るとか濡れるの意味で、雲南省の方は麗しいの『麗』なんだ。どお、わかった？」

「うーん、よくわからないけど、とても参考になりました。ところでさあ、峪口がよく言うシャングリラって、どうゆう意味だよ？」

「うん。……地上の楽園とか、理想郷ってことかな」

「へーえ、すんげえー。そんなにいいところかあ？ 行ってみてえなあ、わしも……」

「それはそれは素晴らしいところだよ。今でも目に浮ぶ。機会を作っつて、ぜひ行こうぜ」

「今度は俺も誘ってくんどお。冬ならでえじょうぶだからよお」

「おう、峪口、三人で、絶対に行こうぜ」

施川が力を込めて言い放った。

五、中国人のおやつは種？

やがてツアーの同行者が山を下りだしたので、三人もその後に従った。

「明日は漓江下り、もっと上流に行つてこの川を船で下るんだ」

「でも、俺あ泳げねえどお」

「大丈夫だよ邑中君、君の場合は川に落ちても浮くから。ところでさあ、これからどこへ行くんだっけ？」

「水晶館。でもその前に、この公園で少し休憩するそうだ」

一行は、公園の中の木陰になった場所へ添乗員に導かれ、持参したお菓子や果物を食べる者、売店で買ったソーセージを齧る者と、それぞれが思い思いに休息に入った。

施川はビールがない、ビールがないと呟きながら、ペットボトルの水をチビリチビリと飲んでいた。

「峪口い峪口い。あの家族ものすげえなあ。テーブルの上が喰いつ散らかしたゴミでいつぺえだんべえ」

信じられないという表情で、邑中が峪口に嘔きかけた。

「ああ……、しかも当然の如く、テーブルの上や地面にペツペツと喰いカスを吐き出している」

「ところでさあ、あの連中はなにを喰っているんだ？ 種みたいなものを口に入れちゃ、次々に吐き出しているけど」

「恐らく、向日葵の種だな」

「向日葵の種え？ あんなもん、喰うのかあ……。……鳥の餌だんべえ」

「中国人はあれが大好きなんだよ。カボチャとかスイカの種も良く喰う。塩味でけっこう美味しいモンだよ」

「へーえ、あんなもん、美味いんかねえ。峪口も喰うのかあ？」

「ああ、時々スタッフからもらつてね。でも面倒くさいのと、彼らみたいには上手く喰えないのとで、買ってまで食べることはないよ。上海でも店番の小姐やオジサンたちが、店頭で食べている姿をよく見かけた。

足元には喰いカスが山をなしている。

口の中で上手に皮を剥いて、その皮だけ吐き出す。峪口も何度か試みたが、歯と舌で上手く皮を剥くことができなかった。

「しかしあんなに公園を汚して、管理の人に怒られないのかなあ？」
「はははは……、こっちでは掃除を生業にしている人たちがいるからネ。私捨てる人、あなたは掃除する人といった具合に」

2

「峪口いゝ。あのオヤジ、見てみる、ほれ。あれ、サトウキビだんべえ？ あんな硬い皮を歯でバリバリ引っぺがしてンベえ。よくっぽど歯が丈夫なんだなあ」

邑中は、その男の喰いっぷりに見とれていた。

「ほんとだ、すげえオヤジだ。俺たちよりかなり年上に見えるけどなあ」

「六十は優に超えてンベえ」

「ああ、それは間違いない。七十ぐらいだろう」

「わしんとこの親父もすごいけどな。九十歳だけど、全部自分の歯だけ。まだ、車も運転しているしよ」

「そういえば施川んとこの親父さんとは、俺が高校生のときに初めて会ったんだよなあ。去年だったかな、土手で会ったけどちっとも変わってなかったなあ。百歳は軽くクリアできると思うよ」

「耳はだいぶ遠くなっただけど、身体の方は健康そのものだよ。俺の方が先に行っちゃうかもナ……」

「バゝカ、オメエは殺されても死なねえ」

表現は悪いが、邑中の思いやりのこもった言葉が飛んだ。

その公園では、ツアー客の他に地元の老人が四人でトランプに興じていた。

ひと通り腹を満たした同行者たちは、老人たちの迷惑を顧みず野次馬と化している。

「金を賭けているんだろっな？」

施川が囁きかける。

「中国人は博打好きだからな、当然賭けていると思うよ。俺はねえ、もし中国にパチンコが入ったら、働く人がいなくなるんじゃないかと心配しているんだ」

「オメエが心配しても始まんめえよ」

「はははは……、そらそうだ」

「中国人殺るすにゃ〜刃物は要らぬう〜、パチンコ屋あ〜の二、三軒も造ればよおい〜、とくらあ」

施川が下手な節をつけて唸った。

添乗員の、“それではそろそろ行きましようか”という言葉を含図に、みなは一斉に立ち上がり山を下った。

六、入口では客、出口では唯の人

1

駐車場には、またさつきとは違うバスが待機しており、全員を乗せると、一路水晶館を目指して走り出した。

「水晶……、わしはいらんからな」

「まあ、そういうなって、施川あ〜。お付き合ひ、お付き合ひ」

「ふんだよあ。俺あが買うから、付き合えよあ。ほーれ、起てよあ〜」

「しょうがねえなあ、見るだけだぞ。わしは直ぐに出るからな」
入口で仰々しく迎えられた一行は、如何にもといった感じで入場パスを渡され、展示物の説明をひと通り受けると売り場へと誘導されて行く。

店内に待機していた売り子たちは、さあ、カモが来たとばかりに、一斉に客を取り囲む。

観光地では、どこでもよく見受けられる光景である。グルリと店内をひと廻りした峪口と施川は、結局なにも買わずに二十分ほどで入り口へ戻って来た。手になにも持たない二人に、お愛想を言う者も笑みを浮かべるものもない。入るときとは大違いである。

2

しかし、上海に近い杭州などの観光地と比べると、従業員の売り込みは実にあっさりとしたものであった。給与が歩合給ではなく、固定給なのであるうか。

「ほらな、こんなもんだらう。あれっ、邑中は？」

「そういえば、一生懸命なにか品定めをしていたな。そのうち、出てくるだらう」

「放し飼いで大丈夫かいな。……ところで、ビールでも売ってねえかなあ」

と施川は、キョロキョロ辺りを見廻した。

「ないよ。施川くん、次は昼飯だから少し我慢なさい。わかりましたか？」

「はぁーい！ 昼飯ねえ、昨日と同じようなメニューだったら、悪いけど、わしいわ」

「まあ、どうするかは、料理を見てから決めようぜ」

施川と峪口は水晶館の表で、ブラブラと手持ち無沙汰に時間を過ごした。

それから三十分ほどすると、ようやくポツリポツリと同行者たちが表に出て来た。

「邑中の奴、出て来ねえなあ……」

「他の連中も、まだほとんど出て来てないよ。どうせ、約束の時間に全員揃うことなんてないんだから……」

それから十分ほどして、邑中が荷物をぶら提げて出て来た。

「おつ、なんか買って来たな」

「うんだあ、わりいわりいなあ、待たせてよあ」

なにかとても重そうな荷物だ。

「なに買ったんだよあ、むくらちゃん？」

「いいべよあ、なんでもねえよあ」

「どれ、ちよつと見せてみる」

施川が強引に袋の中身を覗き込んだ。

「おつ、おおおお……、またバカデカイのを買ったなあ」

「なに、なに買ったんだ？」

「置物だよあ。いいべよあ」

「置物……、どれどれ……」

「いいよあ、見なくていいよあ」

「な、なんだこりやあ……、パンダか？」

「うんだあ、水晶で作ったパンダだ。娘にいかんべえと思ってよあ」

「娘さん、いくつだっけ？」

「二十八ぐれえだあ」

「オマエねえ、二十八の娘が喜ぶかあ……」

「いいべえよあ。勝手だんべえ」

「いいけどよあ。だいたい、これガラスだろう。なあ、峪口い？」

「うーん……、邑中には悪いけど、恐らくそうだなあ。水晶にしては綺麗過ぎるだろう。で、いくらで買ったの？」

「あのねえちゃんが絶対本物だ、ってゆったもん」

「どのねえちゃんが？」

「あのねえちゃんだあ」

「うん？ あつ、添乗員だな」

「へへへっ……、うんだあ。一万元でゆうのを三千元にもらった。安かんべえ？」

「あのねえちゃんは店とグルだぞ」

「ふんなことねえよお。オメエらと違って、親切に買い物に付き合ってくれもん」

「そらまあーなあ……、あつちは商売だからな」

「いいんだよお。俺あが買ったんだから、オメエらにウダウダゆわれたくねえ」

「四万五千円つてとこか。いいいかあ、今更返品てわけにもいかねえだろっ」

「そうだな。わしらがウダウダ言っても始まらねえなあ」

「うんだ」

峪口が予想した通り、予定の時刻を三十分ほど過ぎてようやく全員が揃い、バスは昼食場所へと向かった。

バスの中で、買ってきたばかりの水晶の腕輪を誇らしげに自慢しているご婦人もいる。

第四章 桂林の名物は？

「もうええ、昼飯は別行動じゃ！」

1

やがてバスは、とあるホテルの中庭に入って行った。

「おや、ホテルだよ。これは期待できるかもな」

と峪口が言つと、

「どうだかなあ。わしはもう期待しないことにした」

施川は諦め顔で言った。

昨日と同じく茶碗や箸を熱湯で消毒し待つことしばし、運ばれてきた料理はと見ると、

「あゝあ、期待した私がバカだった。魚の種類が違っただけで、メニューはまったく昨日と同じじゃないか」

と、施川が大きなため息をもらした。

「こつちのツアーはこんなものさ。でも施川、昨日はけっこう喰っていたじゃないの」

「まあな、一回くらいは我慢できるよ。でも、もう駄目。他へ行こうよ」

「待てよ。そうはいつでも、午後のスケジュールもあるからなあ。

『象の鼻山』とか『伏波山』とか……」

「市内観光だろう。そっちもいいよ。ホテルで休もうぜ」

「でもなあ……、邑中はどう？」

「俺あ行ってみてえなあ」

「同じだよ、象だの豚だのって言ったって。鏡でも見ているよ」

「あつはははは……。豚はねえだろうけど、まあ市内観光だからな」

「そおかあゝ、うんじゃあけえんべかあ（帰ろうか）」

「よし。じゃあ峪口いゝ、頼むわ」

「そうだなあ……、そうするか。添乗員に話してくるよ」
峪口は施川の具合が少し悪いので、ホテルで休みたいと説明し承諾を得た。

ホテルまではタクシーで二十分ほどの距離だという。

ホテルに戻りホテルマンに、どこか、美味しいものを喰わせる店を紹介してくれと頼むと、親切に店名と地図を書いてくれた上、入口付近に屯するタクシーの運転手に行き先も指示してくれた。

運転手は小柄な気の良さそうな男で、よくしゃべった。

「日本人デスカ？ コンニチハ。サヨナラ。オイシイ。日本人スケベ……」

などと、知っている限りの限りの単語を披露し、市内観光を半日、百五十元でどうだ、と売り込むことも忘れない。

「日本人スケベは余計だろうが、ったく、もう。なあ、峪口いゝ。人畜無害のわしを目の前にしてよお」

「へへへっ……、人畜無害だとお、笑っちゃうべえ。なあ、峪口いゝ。へっへへ……」

と豪快に笑い飛ばす邑中だった。

「なに、なんか文句ある？」

「ないない。あつはは……」

「なんだよ。峪口まで……」

と不満をもらす施川。

案内された酒店レストランの前で観光案内は丁重に断わり、運転手に五元のチップを渡して別れた。

2

すると直ぐに、店の小姐（女性従業員）が三人の所に飛んできた。店内に導こうとするのを制し、峪口は外に置かれたテーブル席を選んだ。

席に座ったところに、まだあどけなさの残る女の子が、お茶と取り

皿や箸・茶碗などのセットを持ってやって来た。
続いて注文取りの小姐がおもむろに歩んで来る。
それぞれ役割がわかれているのだ。

「まずは、冷たいビール！」

「俺あはコーラ。あんべえ？」

「百事可楽ならあるって」

「バ、バイ、な、なにい？」

「ペプシコーラならあるそうだ」

「ペプシのことバイ、シーなんとかってゆうのかあ？ うんじゃ、

コカ・コーラはなんてゆうんだあ」

「うんだあ。可口可楽」

「な、なんだあ？ もう一回ゆってくんど」

「クウー、コオー、クウー、ラだな」

「バイ・シーとクウー・コオーか……、バイ・シーにクウー・コオ
ーと……」

施川がブツブツと言っている。

「バイでもクウーでも、どっちでもいいからよお、ひゃっこい（冷
たい）のをもらってくんどお」

施川が口火を切り、峪口が小姐に、とにかく先にビールとコーラを
持って来るようにと伝えた。

「冷たいやつよ、冷たいやつ」

「わかつているとき、日本人の客が多いからね、桂林は」

三人の間を心地よい風が吹き抜けていく。

「おっ、きたきた。……桂林ビールか、どれどれ？ うーん、よく
冷えている。これならオツケイ！ オツケイ！」

ビールを前にすると、施川はすこぶる機嫌が良くなる。

「ほら、邑中も少し飲め」

「ちつとな、ちつと」

峪口と施川は、二杯、三杯と立て続けにビールで乾杯を繰り返した。
だが邑中は、ほんの少しだけビールに口をつけると、残りは地面へ

捨ててコーラに切り替えた。

「あっ、もつたいねえな。豚に真珠だ」

「ハゲに整髪料だんべえ」

「ぶッ！」

「あらあー、きつい切り替えしだこと。 邑中、一本！ ふふふふ…」

3

そんな三人の行動を、小姐はニコヤカに見守っている。

「ふーう、美味いッ！ やっと落ち着いたよ。お姐さんも一杯どう？」

施川がいつも女性にするようにビールを勧めたが、笑顔で体よく断わられた。それも、いつものことだが……。

「さあーで、なにを注文するかな？」

「うめえもん頼むべよお、峪口い〜」

「任せておけよ。ええと、……スープに野菜の炒め物、それとチャ

ーハンか焼きソバだな。どっちにする？」

「俺あ焼きソバにすんべえ」

「両方もらえよ」

「そうするか。後は、メインディッシュをなんにするかだが……。

魚は桂魚がいいな、やっぱり」

峪口が桂魚を注文すると小姐は、

『名前を見てもおわかりのように、桂魚は桂林の名物で、上海などで売られているものとは味がまったく違いますよ』

と自慢げに説明した。峪口がなぜと訊くと、

『桂林の名の由来となった桂花（金木犀）の花が川に落ちて、それを食べて育つから、魚の身が良い香を放つのです。川魚にありがちな泥臭さもありません』

と説明を付け加えた。

峪口からの説明を聞いた施川は、

「へーえ、そうなんだ。ところで、焼いてもらえないかな？」

「俺も、それぞれ。焼いてもらうべえ。蒸したのはうんまく（美味く）ねえ」

「そうだな。……、焼きもあるってさ。但し、アルミホイルの包み焼きだけどネ」

「ふんとは、塩焼きがいいけどなあ。ふんで、醤油はあんのかあ？」

「贅沢はゆわわないの、アルミホイル焼きでもあるだけマシだよ。えつ、魚を選べってさ、どう見に行きますか？」

二、食材？ ペット？

1

小姐に連れて行かれた場所は生きた食材置き場で、鶏、家鴨、魚、そしてなにやら得体の知れない動物が、檻に入れられて所狭しと並べられていた。

ひとしきり見渡した施川が、おもむろに口を開いた。

「なあ、峪口い〜。……あれって、モルモットかなあ？」

「うーん……、顔は確かに、モルモットだけど、デカイな。喰うんだろうな、あれも」

「まさか、レストランにペットは置いてねえべえ……」

「思い出した。あれはプリーリードックだ。わしんとこの近くのペットショップで見たことがある。日本で買つと、五万か六万円はするぞ」

その動物に、三人が興味深げに見入っているのを横目で見た小姐が、この動物はとても美味しいと勧めだした。

「なんだって？」

「美味いから注文しろとさ」

「俺あいんねえ。冗談じゃあんめえ。こんなのを喰ったら、サーズになっちゃうべえ」

「ははははっ…、サーズか。ん？ これって雉じゃない、施川？」

「そうだな、雉だよ。へーえ、注文してみるか。高いのかなあ？」

「ええとね。一斤だから、…五百グラムで六十元だとさ」

「注文すんべえ。峪口いっ、雉なんて滅多に喰えねえべ、俺あが銭つ子出すからよお」

「おっ、太っ腹。そうだな、注文してみるか」

続いて水槽で桂魚を選んでいると、肘まである厚手の手袋をした男が出て来た。

その男は緊張した面持ちで、黒っぽい布が掛けられた一メートル四方の箱に手を突っ込み、太い蛇を掴み出した。

それに気づいた邑中は、キャーツと嬌声をあげて仰け反りながら、

「たっ、たたた、峪口いっ。へっ、へび、へび。俺あ、俺あは長い駄目だあ」

と情けない声をあげた。

振り返った峪口も二メートルはあろうかという黒光りのする蛇に、さすがに息を呑んだ。

「ふっ、太い。険悪な顔だな。毒があるんだろっな、きつと」

峪口はへびを見ると虫唾が走る。しかし、施川は平然と蛇を見ている。

「わしへびは平気じゃ。小学生のころ、小遣い稼ぎによく捕まえて

蛇屋に売ったモンだ。シマへびとか、ママシが一番高く売れたなあ」

「オメエもすんげえ苦労したんだなあ。うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ」

邑中が涙を拭く仕草をしながら言った。

「うんうん、そうナンだよお。わしは家なきツ子でなあ。うっ、うっ、

……。おっ、ハサミで腹を割いたよ。アツと言っ間だな、うまいモンだ」

施川が驚きの声をあげた。

「うえーッ！ 気持ちわりいー。俺あは向こうさ行つてつべえ」
邑中は逃げるように席に戻って行った。

男は手馴れた手つきで腹を割り、肝を取り出すと、蛇をポイツと床に投げ出した。

肝を抜かれても、まるでそのことに気づいていないかのように、蛇はグネグネとのたうっている。

「あの肝、どうするのかなあ？」

「日本だと焼酎に入れて、グツと呷るんだよな。恐らく、こっちでも同じだろう」

「それにしてもこの臭いは、嫌だねえ。獣臭というか蒸れたよくな生臭い臭い。息苦しくなってきた」

そう言い置いて、施川も邑中のいる席に戻って行った。

2

峪口も同じ気分で、桂魚を適当に見繕つてから表に飛び出し、思いっ切り外の新鮮な空気を吸い込んだ。

食事の前に、あんな場面を見なければ良かったと後悔した。

「雉に桂魚、ちよつと注文のし過ぎかもナ。こんなに喰い切れねえぞ」

「よかんべえ峪口いー、うめえとこだけ喰えばよかんべえよお」

三人は、前菜と野菜の炒め物をつまみにジョッキを傾けながら雑談をしていると、やがて桂魚のホイル包み焼きが出てきた。

味は醤油ベースで黒酢味の利いたタレ、強火でタレが焦げて、ちよつとテリヤキ風味になっている。

早速箸をつけた施川の表情が輝いた。

「美味しいッ！ 焦げた酢豚のタレって感じだけど、これは正解だ。

うん、美味しい美味い。皮のところが、特に芳ばしくて美味いわ」

施川は美味しいものにありつくすと、他人を気にせずガツガツと口に放り込む。

「どれどれ……、ふんとだ、うんめえ〜。施川あ〜、ゆつくり喰え。取らねえからよお、ガツガツ喰うなよお」

と、邑中がからかってもまったく意に介することなく、施川はひと心地つくまで豪快に食べ続けた。

峪口も、確かに上海で食べた桂魚とは一味も二味も違うと思った。

三人は美味いうまいを連発しながら、先を争うように食べ続け、アツと言う間に平らげてしまった。

そして、次の料理が出て来るのを期待して待っていると、やがて雉のスープと雉肉の炒め物が運ばれて来た。

炒め物には雉肉、ネギとクワイにブロッコリー、そして大粒の大蒜と唐辛子がたっぷり入っている。

大蒜もホツコリとしていて美味しい。

しかし、スープにひと口つけた峪口は、従業員を手招きして、

「このスープは味がないよ。塩を入れ忘れたのかな。やり直し、やり直し」

と言うと、やって来た小姐はひと言の言い訳もせず、

「対不起ごめんなさい、直ぐに作り直して来ます」

と言って、スープの鍋をさげて行った。

教育も良くできているようだ。上海よりもずっとサービスが良いことに、峪口は関心をいだいた。

「鴨と葱はよく合うけど、雉と葱もなかなか美味しい。肉よりもむしろ葱が美味しいなあ」

「鴨に比べると雉は少し淡泊かな。結論としては、施川さん……」

との峪口の問いに対して、

「鶏の方がうんめえ〜！」

と邑中が先に答えたので、三人は声を揃え、顔を見合わせて大笑いをした。

周りの客と従業員が怪訝な顔でこちらを見ている。

第五章 マドンナ登場

一、ポニーテールの可愛い娘

1

「ところで峪口いゝ。あの娘……、可愛いなあ」
施川が声を潜めて囁きかけた。

「うん、どの娘よ？」

「ほら、あのテーブル。オヤジ三人と一緒にいる娘さ。さつきからこつちをチラチラ見ているけど、わしに気があるのかもな」

「ねえねえ、絶対にねえ。二人とも止めるよあゝ」

と制する邑中の言葉を無視して、

「添乗員じゃないかな、恐らく。どう見ても変な組み合わせだものな。それよりもアンタは人畜無害じゃなかった？」

「人畜無害だつて、可愛いものは可愛いんだよ。峪口いゝ、ちよつと話し掛けてみるよ」

二人は声を潜めてヒソヒソと話し続けた。

「止めるつてばあゝ。オメエら駄目だよあゝ、喧嘩なんべえよあ」
心配そうに邑中が忠告した。

邑中はこういったことが大の苦手で、三人で北海道に旅行したとき、女子大生から逆軟派され、部屋に逃げ帰つて来たことがある。

その話を聞かされた峪口と施川は、しばらく笑いが止まらなかったものだ。

「いいじゃねえか、なあー。写真を撮ってくれ、とか言つて話し掛けてみるよ。なあー、旅の恥はかき捨てつて言うだろう。なあー、峪口いゝ」

「オメエは恥の大安売りだなあ。日本の恥だんべえ」

「けえけけけ……、なんと言われてもわしは気にしません。なあ

「、峪口い」

先ほど目ざとく彼女に気づいた峪口も、ポニーテールの良く似合うその娘が気にはなっていたので、

「わかった、わかった。待っているよ」

峪口は意を決して、その娘のいるテールへと向かった。

「うんもあー、しょうがねえなあ。俺あ知らねえど。勝手にしろ」
後ろから、邑中の嘆きが聞こえてきた。

「対不起すみません……」

と峪口がその女性に声をかけると、

「日本語、わかりますよ」

にっこりと微笑んだ女性から、流暢な日本語の答えが返って来た。

「ご旅行ですか？」

「ええ、そうナンです。あそこにいるおじさんたちと」

と言つて、施川の方を指差した。

「ほっほほっ…、手を振っていますね。面白そうな方たちですね。

……いいですわよ。写真、お撮りします」

2

同行者の了解を得た女性が、峪口と一緒に二人のところへ向かった。峪口の説明に施川は、

「彼女、日本語わかるんだ。なあ〜んだ、それなら最初からわしが行けばよかった」

そして女性が側に来ると、

「綺麗な方ですねえ」

と、恥ずかしげもなく言う。ほんとうにいつもながら調子のいい男である。

「お仕事ですか？」

「ええ、CITS旅行社です」

「CITS!?!? ……、ぼ、ぼくたちのツアーと同じだ。なあな

あ、峪口い」

「へへっ…、ぼくたちだと、笑つちまうべえ。唐辺木があ」

「あんだと……」

「はっははは……。袁さんっていう添乗員の方、ご存知ですか？」

「もちろんご存知ですわよ、同僚ですから。ふふふっ…」

「ところで、あの人たちは？」

施川がこちらを見ている三人の男性の方を顎でしゃくった。

「韓国からのお客様です。これから空港にお送りするところですよ」

「かつ、韓国語もできるんですか？」

施川の顔に尊敬の念が浮かんだ。

「ええ、簡単な会話ならできます。でも、どちらかというと、日本

語の方が得意ですわ」

「じゃあ、じゃあ、あの三人を送った後の予定は？」

興奮気味に期待を込めて、施川が質問した。

「今日はそれで終わりです。明日はまた別のお客様のご案内です。

国慶節は忙しくって」

「た・に・ぐ・ちいー……」

「なっ、なんだよ。気持ち悪い声を出して」

「あのさあ、ちよつと、こつち、こつち」

と峪口を自分の席に導き囁いた。

「どう、午後、彼女に案内を頼もうか？」

「そら、まあ、いいけど。でも、彼女の都合も訊かないと……」

「俺が訊いてみるよ」

こういうことには学生時代から、実に積極的な男である。邑中はそ

の間、一言も言葉を発しない。

「はい、……いいですわ。そうですね……、四時ごろでしたら。

ところで、みなさんはどちらのホテルにお泊りですか？」

施川が満面に笑みを浮かべた。

峪口も内心喜んでいた。

「わかりました。それでは四時にホテルへお伺いします。さあ、も

「う行きませんと……」
と言って、彼女は名刺を置いてテーブルに戻って行った。

3

「Zhang・Liさんか」

「うん、なになに、張麗さんか。麗ちゃん、麗ちゃんと」

施川はすっかり舞い上がっている。

「オメエ、こうゆうことは、ほんとにうめえなあ」

邑中がようやく口を開いた。女性の前では実に大人しい。

峪口が精算の合図を送ると、小姐が伝票を持って走って来た。

「なにっ！ 六百九十元……、高いなあ。なになに……、雉が百八十元、桂魚が八十元、野菜炒めが三十元、チャーハンと焼きそばが同じく三十元と、ええと……、ビールが二十、二十五元！？ たっけえ！ ……何本飲んだっけ？」

「八本！」

施川が元氣よく応えた。

「そうか、そんなに飲んだのか。お茶が十元、おしぼりが十元だと、なんでも金を取るんだよなあ」

「峪口いゝ。オメエ、えれえ細っかくなつたなあ」

「ああ、こつちじゃ、明細をよく見ないと誤魔化されるからね。会社の連中はもつとすごいぞ。伝票の明細を一品一品、全部チェックするもの」

「峪口いゝ、もういいよあゝ、俺あが払うからよあゝ。ほれ、これで足りんべえ？」

と、邑中が百元札の束を机にポンと置いた。

「割り勘にしようぜ。なあー、施川？」

「うん、すつきりと割り勘にすんべえ。あつ、また邑中の言葉がうつっちゃったよ」

「いいてばよあゝ。俺あが出すつてばよあゝ」

「駄目ッ！ はい、割り勘で二百元！」
「こらっ、施川っ！ 三十元足りないぞ」
「細かいこと言うなよ。段々中国人になってきたなあ、峪口は…
…。ああ、満足満足。どう、ホテルでひと眠りしようか、シャワーも浴びたいしね」
「うんだなあ」
「そうするか。タクシー、タクシー、と……」
「おおっと、その前に、麗ちゃんにご挨拶、ご挨拶と……」
施川は嬉々として張麗の元に向かった。

二、恋の鞘当

1

峪口がホテルで目覚めると、時刻は午後三時を少し回ったところである。
酔いも手伝い、ベッドに身体を投げ出した途端に眠ってしまったらしい。
邑中はまだ豪快なイビキをたてている。
施川のベッドを見るともぬけの殻、トイレかと思ったが気配がない。いったいどこへと心配していると、間もなくドアをノックする音が聞こえた。
「おい、わしだあーッ！ 開けてくれえーッ！」
施川だ。
「どこへ行ってたんだ？」
「へへへっ…、楽しみで眠れなくて、表を散歩してきたんだ。それにしても埃っぽい街だなあ」
「そつだ。さつき、張麗さんから電話があったぞ」
「えッ！ 麗ちゃんから。で、な、なんだって？」

「うん、……急に仕事が入ったから、約束はなしにしてくれってさ」
施川の表情が一瞬にして凍りついた。

あまりに落ち込む施川が気の毒になり、

「うそうそ、嘘だよ」

「峪口いゝ、いくら大人しいわしでも怒るぞお、ほんとによお…

…」

などと二人が戯れていると、部屋の電話が鳴った。

顔を見合わせる二人。施川に促がされ、峪口が電話を取った。

その様子を心配そうに見つめる施川が、

「麗ちゃん？」

と訊き、不安そうに峪口の顔を覗き込む。

「うん……」

峪口はわざと暗い顔で応じた。

「駄目、か？」

落ち込む施川に、峪口はにやりと笑いかけて、

「もう直ぐホテルに着くってさ」

「ほっ、ほんとか？ こんどは嘘じゃねえだろうな」

施川の表情が満面の笑みに変わった。

「早く下に行こう。待たせちゃ悪いよ。いや、待てよ。シャツを変

えようかな。なあ、どう思う？」

「好きにすればあ。邑中を起こさなくっちゃ……。おい、起きろよ」

「うらうら、早く起きろーッ！ くらあーッ！ 置いてくぞお」

施川は邑中の身体を激しく揺すりながら怒鳴る。だいぶ気合が入っ

てきたようだ。

「ううーん、もう喰えねえ。あつ、……なんだ、どうしたんだあ？」

と寝ぼける邑中に、

「うらうらうら、いつまでも寝ぼけてるんじゃないやねえ。うらあーッ！

起きんかあーッ！」

施川が身体をくすぐる。

「や、止める、止める。くすぐってえよお。施川あゝ、止めでくれ

え〜。わがった、起きつからよ〜、起きるつてばよ〜」
叫び声をあげて、邑中は飛び起きた。
「わしらは先に行くぞ」
「ちつと、ちつと待ってくんど。冷てえな〜、オメエらは。俺あ
ヒゲ剃つからな」
「いいよ、そのままです。もう時間がない。直ぐ麗ちゃんが来るんだ
からな」
「直ぐだよ〜。ちつと待っててくんどお」
「はいはい。……一階で待ってるよ〜」

2

ロビーで待つこと十分、その間、施川の遅いな遅いな、大丈夫かなあ、ほんとに来るかなあ、という言葉は何度聞いたことが……。そわそわと落ち着かない施川。
峪口が突然立ち上がって叫んだ。
「おっ、来た、来た！」
「えっ、ええ、えっ……。どいどい？」
キヨロキヨロとする施川に、
「邑中が……」
と付け加えた。
「なんだ、不細工なあ」
「なんだ、石田純一なあ、はねえべえよあ」
「だ、誰が石田純一じゃ」
「へへへへ……」
「あれ、オマエさん、ヒゲ剃って整髪して。なんだよ、シャツまで着替えてきたのかあ。なに、期待してんだよ。それにしても派手なシャツだな」
「いいべえ、余計なお世話だんべえよあ」
「まーったく、ぼくは女性には全然興味がありません、て面して、

しっかりと狙っているじゃねえか」

「へへへへ……、男の身だしなみだんべえ」

「なあーにが、身だしなみだ。不細工な面曝しやがって、このムツリスケベエが……。そつちで毛づくろいでもしてろ、まったくよお」

「まあまあ、施川君。男はみんなスケベなものサ」

「なんだよお、峪口も麗ちゃんを狙っているのかあ。……やべえ、やべえ」

と言って立ち上がり、表に目をやった施川が、

「おつ、来た来た。麗ちゃんだ。今、タクシーから降りた」

と叫ぶが早いか、入り口に向かって走り出した。

「おい、落ち着けよ。恋人が来たわけじゃないんだから」

逸る施川は、制する峪口の言葉も聞かず、

「う、うーん、恋人、桂林の恋人。どうしようかなあ……、結婚してくれて言われちゃったら、どうしようかなあ……」

などとバカなことを言っている。

「ねえよ、ねえ、絶対にねえ。ブアゝカ、まあーったくガツガツして、みつともねえ」

と言いながら、邑中は悠然と立ちあがって入り口に向かった。

峪口は、その後ろにしたがった。

施川はタクシーのところまで出向き、満面に笑みを湛えて張麗を迎えた。

「遅くなりました」

張麗はひとり一人に丁寧な挨拶をした。

目をしっかりと見つめながら話す張麗に、峪口は照れながら、

「いえいえ、時間通りです。申し訳ないですねえ、お疲れのところを……」

と挨拶を返えしながら、胸にほのかなトキメキを覚えるのを禁じ得なかった。

「あちらに座ってスケジュールを考えましょうか？」

と促がされ、張麗と向かい合う形で三人はソファーに腰を下ろした。
「もう時間もあまりありませんから、遠くは無理ですね。どこかご覧になりたいところはございますか？」

「いえ、麗ちゃんがお奨めの場所ならどこでもけっこうです。お任せします」

施川が口を挟んだ。

「レイちゃん？ って、私のことですか？」

「あつ、はい。日本語読みではレイちゃんです」

「そうですか。うっふふふっ…、麗ちゃん、なんて呼ばれたのは初めてですわ」

「峪口さんは如何ですか、どちらかおありですか？」

「いいんですいいんです、麗ちゃんのお奨めの場所で。なあ、峪口いゝ。邑中っ！ 文句ねえだろう」

施川は早くもライバル心をむき出しにしている。

「ねえねえ。ブアゝカ」

「うふふふっ…。それでは杉湖の日月双塔に行ってみましょうか。

湖の中に美しい二つの塔が建っているよ。夜になると、それがライトアップされて、とても綺麗ですよ」

「あつ、いいないいな。そこは近いですか？」

「ええ、ここからでしたら、そうですねえ…、車で二十分もあれば着きますわ」

「よし、そこへ行きましょう。峪口、カメラ持ったよな。邑中、銭持ったな」

「はいはい、お代官さま」

「へへへっ…、ブアゝカ」

「…？ なんですの、お代官さまって？」

「ははははっ…、冗談です。日本のジョークですよ。峪口君、返事は一回ね。邑ちゃん、アンタは人間の言葉はまだ無理ね」

四人は杉湖の湖畔でタクシーを降りた。

連休中の所為か湖畔は観光客で大賑わい、日本語もあちらこちらで飛び交っていた。

「それほど大きな湖ではありませんから、湖畔を一周してみましようか？ ほら、あれが日月双塔です。ここから双塔をバックにして、写真を撮られたら如何ですか？」

「よし、撮ろう。峪口、頼むよ。わしと麗ちゃんのツーショットを撮ってくれ」

「わかったわかった。こら、施川ッ！ 肩を抱くなっ！」

「ったく、もう。んだから、日本人はスケベっだってゆわれんだんべえ」

邑中も呆れたとばかりに首を振った。

「あッ！」

「えッ！ なんですか？」

「麗さん、フラッシュは焚かないください。ハレーション起こしますから」

「そうですね。まだ、フラッシュは早いですわね。ハレーション……？」

峪口の言葉に生真面目に答える張麗に、

「へえへへ……、そうゆう意味じゃねえべえ」

邑中は、これこれ、と自分の頭を指差した。

「またまた、このお。わしを陥れようとして。へへへ……、これこれ……」

と、施川は自分のハゲ上がった頭をピシヤリと叩いた。

「えっ、……まあ、面白い方。うふふふ……」
張麗も声をあげて笑った。

「よし、施川、代われ。今度は俺と麗さんだ」

「えっ、えーっ、峪口も撮るのお」

「あたりまえだろう。ほら、早くしろ」

「チエツ！　しょうがねえなあ。よし、麗ちゃんだけ撮ろう、つと」
「こらこら、しっかり撮れよ」

「うふふふっ…、施川さんって面白い方ですね。みなさんお付き合いは長いのですか？」

「長いもなにも、もうかれこれ四十年。腐れ縁、腐れ縁」

「俺あとハゲじゃなくて、施川とは四十年ぐれえのモンだべえ。峪口とは、……うんと、ご、五十年だあ」

「それこそ、えええーッ！　ですわね。みなさんはそんなお年なんですかあ。とてもそうは見えませんが」

「またまた、麗ちゃんはうまいこと言っつてえ。わしはともかくこの二人は、どう鼻屑目に見ても年相応でしょう」

「まあ、施川さんたら。うふふふっ…」

「その頭で、ずうずうしい奴だ」

邑中が囁いた。

「うん？　わしの頭がどうかしたか？」

「ボケは来てるようだけど、耳はいいみてえだな」

「ほほほほっ…。ところで、くされえんってどうゆう意味ですか？」

「腐れ縁。まあ、なんというか、その……悪い縁で、切ろうとしても切れない関係、とでもゆいませすか」

「まあ、ご冗談を……。ほんとうは仲がおよろしいンでしょう」

「はっはははっ…。まあ、喧嘩したりくっついたり、正に腐れ縁かな」

考えてみれば不思議なもので、お互いに言いたいことを言い合いながらも、喧嘩することもなく、親しく付き合いだした高校生のときからでも、かれこれ四十年以上付き合いが続いていることになる。

峪口にとっても、四十年以上も変わらず付き合いが続いている友は、施川と邑中だけだった。

家が近いだけでは説明できないなにかがあるのだらう。結局は相性がいいということなのか。

「邑中、オマエも麗さんと撮れよ」

「俺あ……、いいよお」

恥ずかしそうに応える邑中に、

「ほら、せつかくだから撮れよ」

と峪口が押し出して、二人を並ばせた。

邑中は顔を赤らめている。

ほんとうに純朴な男である。

「三人でお撮りしましょうか？」

「すいませんが、二人ずつお願いします」

「あら、なぜですか？」

と怪訝がる張麗に、

「それが笑っちゃうんですよ。邑中がねーえ……」

施川が説明をしようとするすると、

「あつ、いい、いい。なんでもねえ。施川、黙れーッ！」

と邑中が慌てて遮って、

「三人で撮るべえ。ほれ、早く並べ、並べ」

と峪口と施川を促がしたので、二人は顔を見合わせて大笑いをした。

「まーあ、おかしな人たち。なんですか？」

「はっははは……。ああ、可笑しい。笑いが止まらない。はっはは

は……。実はね、麗さん……」

「駄目だ、駄目だよお。早く行くべえ、行くべえ」

杉湖の湖畔は石の遊歩道が張り巡らされていて、歩いて一周できる

ようになっていて。小一時間もあれば廻れるとのことだ。

観光客だけでなく、寄り添う若い恋人同士の姿もたくさん見受けら

れた。

「いいな、いいな。麗ちゃん、ぼくたちも座りましょうか。峪口と

邑中は、二人でどっか散歩でもしてきてよ」

「まあ、施川さんたら。うふふふっ……」

湖畔を暫く歩むと大きな橋に行き当たるが、遊歩道はその橋の下を通り抜けられるようになっていた。

四人は冗談を言い合いながらのんびりと歩を進めた。

「ほら、あそこにガラスの橋がありますですよ？」

「はい。あれは、ぜつ、全部ガラスですか？」

「そうですよ。綺麗でしょ、施川さん？」

「ふんとに綺麗だけど、乗ったとぶっ壊れんじゃねえかあ。おつかねえなあ」

「…………？ 邑中さんの言葉って、難しくて」

「へへへへ…………。邑中のひょーじゅん語、わしにも理解できません。峪口、通訳」

「あつ、ごめんなさい。私、まだ日本語があまり…………」

張麗は秀囲気を読むこともできるようだ。峪口はそんな張麗を好ましく感じた。

5

「ぼくの日本語が一番正しい。麗さんもぼくの日本語を勉強してください。施川と峪口のは田舎弁です」と邑中が珍しく冗談を言った。

「まーあ。邑中さんも、ちゃんと話せるじゃないですか」

「実はそうナンです。でも、疲れる…………」

「無理をするなよ、邑中君。君の特徴はやっぱり、だんべえ言葉ナシだから。ところで、あの橋は中に入れるんですか？」

施川はいつものベランメエ調の語り口と違って、丁寧な受け答えをしていた。女性の前だとコロリと変わる。

現金な男である。

「ええ、中に入ることはできます」

「でも、鍵がかかっていますよ」

「今はお金を払わないと入れなくなっています。橋ができたばかり

のころ、珍しいものだから、たくさんの人が押しかけて、重みで壊れちゃったんです」

「入ってみようか、麗ちゃん？」

「止めておきましょう。それよりも、日月双塔に登ることをお勧めしますわ」

「あれ、登れるんですか？ それはいい、早く行きましょう」

施川がはしゃいで言った。

「煙となんとかは高い所が好き、ってね」

峪口が茶々を入れると、

「あつ、それは私も知っています。確か、バカ……」

「そう、バカです」

「酷いな、麗ちゃんまで」

「ほほほほっ……ごめんなさい」

「当たっていんべえよ」

邑中の言葉に、四人は顔を見合わせて大声で笑った。

「もう少し行きますと、向こう側に渡れる玉製の橋があります。その袂に樹齢千四百年とも千五百年とも言われている、大きなガジュマルの木がありますよ」

「ギョクつて、なんですか？」

施川が興味深げに聞いた。

「高価な石のことですわ。高貴な方の椅子を玉座とか言うでしょう」

「へーえ、すごいですねえ。お金がたくさんかかったんでしょうね？」

「さあ、金額わかりませんが、きっと大変なお金でしょうね」

間もなくその橋に行き着くと、橋の袂に大木が生い茂っていた。

幹が太く黒ずんでいて、樹の高さよりも広く、枝葉を空間に思いつきり広げた、南国特有の大木である。

「なるほど、デッサンわあー！」

峪口も思わず感嘆の声をあげた。

「石丸電気かあ……」

写真集を買うほど峪口は巨木に興味を持っていて、悠久の時を超えた巨木には、なにか不可思議なものを感じていた。老後はカメラを担いで、全国の巨木巡りをしたいものだと考えている。

「さあて、そろそろ行きましようか、峪口さん」

巨木に魅入られたように見入る峪口に、張麗が優しく声をかけた。呼びかけで我に返った峪口は、

「すつ、すいません。つい、魅入られてしまいました。それにしても不思議なものですね」

「えつ、なにが、ですか？」

「いえ、いいんです」

峪口は巨木から感じる不可思議を言葉にしようとしたが、うまく表現ができない。

また、無理に説明しても、到底理解は得られないだろうと諦めた。

6

四人は玉の橋を少し割って持ち帰ろうか、などと冗談を言い合いながら渡り終えた。

湖畔には鬱蒼と木々が茂り、真夏並みの暑い日差しを遮ってくれており、しかも湖面から吹く風が心地良く、長い距離を歩くことも苦にはならなかった。

しばらく歩いて行くと、やがて開けた場所に出る。そこにはベンチがいくつも置かれていたが、それぞれにアベックが席を占めていて、空きはひとつもなかった。

「ここは景色もいいし、少し休みたいんだけど、……席が空いてないねえ」

と、施川が辺りを見回し不満げに呟いた。

施川の不満が聞こえたわけでもないのだろうが、一組の男女がベンチを離れて行った。

すかさず駆け寄った施川が、

「麗ちゃん、こつち、こつち」

席は誰にも譲らないぞ、とばかりに大声でみんなを呼んだ。

「麗ちゃん、真ん中、峪口と昆中はそつち。オマエら、あんまり麗ちゃんに近づくなよ」

「ははははっ……。わかった、わかった」

「ほほほほっ……。ほんとうに施川さんて、面白い方ですわね」

「ちよつと待っていてください。売店で飲み物を買って来ますから。

峪口いっ、麗ちゃんを口説くなよ。昆中、……オマエはいいや」

「バカゆつてねえで、早くけえに行けッ！ シッ、シッ！」

なんだかんだとうるさいが、気の良い男である。

「羨ましいわ。ほんとうに仲の良いお友達で……。男同士って、いいですわね」

「気の置けない男です。いい奴ですよ。少しうるさいけど。ふっふふふ……」

「少しじゃあんめえよお。へえへへっ……」

「みなさんは旅行で、中国にいらしたのですか？」

「ええ、この邑中とあの施川は日本からですけど、ぼくは上海で仕事をしています。もう駐在して六年になります」

「そうなんですかあ。私も時々上海にまいりますのよ。もちろんお仕事ですけど。上海は大都会ですものね。私も、ぜひ住んでみたいものです。桂林は田舎でつまらなくて……」

張麗の言葉には、上海への憧れが色濃く漂っていた。

「こんな環境のいいところに住んで、それは贅沢ってもんですよ。上海は確かに刺激的だけど、住むにはあまりいい場所とは言えませんが。それに物価も高いし、住み難いですよ」

「それでも田舎の人間から見たら、住んでみたいと思いますのよ。こんど上海へ行く機会がありましたら、ご連絡してもよろしいです

か？」

「えっ、ええ、もちろんです」

突然の申し出に、峪口はシドロモドロに応じた。

「ご家族の方も一緒ですか？」

「えっ、……いえ、単身です。ご連絡をいただければ、そんな嬉しいことはありません」

峪口は額の汗をそっと拭った。隣で邑中がニヤニヤしている。

「ほんとうですか、きつとお電話しますわ。お約束ですよ」
彼女の顔が少し紅潮したように見えた。

三、その声で、トカゲ喰らうや、ホトトギス

1

「おいおい、いい雰囲気じゃないの。峪口いっ、このあゝ、このあゝ」

買い物から戻ってきた施川が、峪口を肘で小突く格好をした。

「はい、麗ちゃんと僕はウーロン茶。峪口と邑中はビールね」

「えっ、ビール。俺あ、ビールはいんねえどお」

「なに遠慮しているんだよ、アル中の邑中さんと峪口さん」

「あら、お二人ともアル中ナンですか？ うっふふふっ……」

張麗は微笑みながら、怪訝な視線を二人に投げかけた。しかし、目は笑っている。

「ほおーれ、麗ちゃんに誤解されたんべえよお。バアゝカ。施川あゝ、ほれ、交換しろ」

と邑中が缶ビールを施川に投げ渡した。

「またまた、麗ちゃんの前だからって格好つけるなよ」

「それはオメエだんべえ。うんもーっ……」

「そうか、しょうがねえ。邑中の顔を立てて、わしが悪者になって

やるか」

「まだゆっているよ、この男は。……ところで麗さん、桂林で一番うまいものって、なんですか？」

峪口は話題を変えた。

「そうそう、夕飯は美味しいものが食べたいなあ」

「うんだあ。銭っ子は俺あが出すと」

施川と邑中も同調した。

「そうですねえ……、やはり魚なら桂魚。エビなんかも美味しいですよ」

張麗は少し考えてから答えた。

「桂魚は麗ちゃんと会った店で食べたから、なあ、峪口い」

「うん」

「あら、そうですね。他にも美味しい魚がたくさんありますよ」

「地元の人たちがでえ好きなものってゆくと、蛇とかゆうんじゃあんめえ？」

「あら、邑中さんは蛇、お嫌いですかあ？」

「きれえ（嫌い）てゆうか、俺あ喰ったことねえもん」

「だったら、是非食べてみてください。美味しいですわよあ」

「ふんだってよあ。峪口い。どうすんべえ？」

邑中が峪口に情けない顔を向けた。

2

「俺は上海で一度食べたことあるよ。こーんな太いやつの唐揚げ……」

峪口は両手の親指と人差し指で輪を作って二人に示した。

「うめえかったかあ？」

数年前に仕事上の交渉相手に勧めら、大王蛇と呼ばれる蛇の唐揚げを、仕方なしにほんの少しだけ齧ったことがある。

肉は少し固めでたっぷりと香辛料が効かされており、味わいだけか

らなら蛇とは気がつかなかったであろうが、如何せん、そのアーチ上の姿から蛇と認識できた。

「唐揚げよりスープが美味しいんです。それに皮を炒めたものは、美容にいいんですよ」

「まあ、蛇はともかく、他には？」

と峪口が訊くと、

「狗（犬）の肉も好まれていますね。だいたいが鍋仕立てですけど……。美味しいお店を知っていますから、なんでしたらご案内しましょうか？」

「犬ッ！？ ……」

三人揃って、同時に驚きの声をあげた。

「そう狗です。冬は身体が温まりますし、とても美味しいですわよ。私も大好きです」

「その声で、トカゲ喰らうや、ホトトギス」

「まあ、峪口さん、なんですのそれ？」

「日本の俳句、川柳かな……？ 麗さんのお話からこの句が浮びました」

「どうゆう意味ですか？」

「なんとというか、その。……なあ、施川」

「おいおい、わしに振るなよ」

「ということは、あまり良い意味ではありませんね」

と、張麗は眉をしかめ怒った表情をつくり、一瞬間をおいて、うふふふつと笑った。

それがまた峪口には、なんとも魅力的なものに感じられた。

「ところで施川さん。お話しの中に時々『わし』という言葉が出てきますけど、どうゆう意味ですか？」

「俺あちゆう意味だんべえ。ふんでもって、わしやも同じだんべえ。なんでオメエは、自分のことをわしって言うんだあ？」

邑中が張麗に説明しながら、施川に質問した。

「うーん、なんでだろう？ なんでか、わしの方が言い易いんだよ

なあ」

施川は自分でも首を捻っている。

「日本語っているいろいろな言い方があるンですよ。だからとても難しいです」

「邑中みたいに、わけのわからない野蛮人言葉を使う奴もいるしなあ」

「まあー、施川さんたら。うふふふっ……」

「ところで麗さん、蛇と犬はこの次にして、今日は普通の食べ物にしましょうか」

「あら、峪口さん。狗も蛇も普通の食べ物ですわよ。この辺りのお店ならどこでも、ごく一般的な食材として置いてありますもの」

「そうですか。上海ではサーズ以来、どちらも販売が禁止されています」

「まあ、上海の人たちは可哀想ですこと。美味しいものが二つも駄目だなんて」

「こればかりは、いくら麗ちゃんのお勧めでも……」

「俺あ、ぜえーったいいらねえかな」

「オマエさんはストレートでいいねえ」

「なんがあ……？」

などと、取り留めのない話をしているうちに、辺りには夕闇が漂い始め、月も顔を出し、湖面にその姿を映し出している。

四、日月双塔に懸かる中秋の名月

1

ライトアップされた湖畔は、幻想的な風景に変わっていく。

「ほら、見てください。日月双塔に月がかかって綺麗でしょう？」

湖に写った姿が、また美しいでしょう」

「すつ、素晴らしい。まるで麗ちゃんのようだ」

「まあ、施川さんたらお上手なこと」

「いやあ、ほ、ほんとうです。素晴らしい……」

「うんだあ」

峪口は日月双塔と月、そしてそれが湖面に逆に写る姿を一緒にカメラに収めた。

「金と銀の塔、どっちが太陽でどっちが月ですか？」

答えはわかっているが、峪口は月並みな質問をした。と、

「そんなの決まっているじゃん、金の塔が太陽に。ねえ、麗ちゃん？」

施川が得意げに答えた。

「あら、……施川さんは賢い」

「ま、またああ、バカにしてえ」

「うふふふつ……。でも、正しいですよ。金色の塔は全て銅で出来ていますのよ」

「なあ〜んだ、金じゃねえのかあ。少し削って、持ってけえんべと
思ってたのによお」

「まあー、邑中さんがそんなことをおっしゃって……。施川さんな
らわかりますけれど。警察に突き出されても知りませんわよ。うふ
ふふつ……」

「うんだあ。施川じゃやりかねえ」

「あらあー。わかっちゃったあー」

「まあー、ほほほほつ……」

「さあて、登ろうか」

峪口の一言で、四人が腰をあげると、直ぐに男性がその席をゲット。
恋人らしき女性を早く、早くと手招きしている。

「おつ、どこも男はたいへんだねえ。頑張つてね。峪口い〜、一人
二十五元だつて、四人でちょうど百元だ」

「はいはい、百元ね」

「いいよ、俺が払うつてばよ〜」

「邑ちゃんは後で食事代を払ってね」
「うん」

塔までは木製の橋がかかっている、橋の途中に小島がある。
小島の中のクネクネとした歩道を進むと、やがて銀の塔の入口に辿り着く。

「あれ、階段を上がるの……、おかしいなあ？ エレベーターがあるって書いてあったけどなあ？」

「峪口さん、銀の塔にはエレベーターがないんですよ。金の塔の方にありますから、そちらへ行きましょう。その階段を下におりてください」

「はい、ここですね」

「急ですから、気をつけてくださいね」

「あれえ〜、わたしには言ってくれないのお〜」

「うふふふっ……。施川さんも、ついでにお気をつけてください」

「あらら、冷たいこと」

「ふんじゃ、俺あはどうなんだあ」

「君は気をつけなくていいの。麗ちゃんを煩わせないようにネ」

「まあー、そんなことはありませんわよ。なんでしたら手をお取りしましょうか」

「えっ、うんにゃ、オ、俺あ、ひ、一人でえじょうぶだあ」

と言っ、邑中は顔を赤らめた。

「ブア〜カ、なに赤くなってるんだよ。冗談に決まっているだろうが」

「うふふふっ……。そんなことございませんよ」

「それじゃあ、わしが頼むわ」

「さっ、行きましょうか、峪口さん」

「あらららら……」

「オメエの方が、ブア〜カ！」

地下に下りるとトンネルに行きあたった。

そのトンネルは湖の中を通っていて、まるで水族館のようである。所々でガラスに寄り添うようにして寝入る魚の姿も見受けられた。トンネルを五十メートルほど進むと、太陽の塔の入り口だ。

外壁も内壁も銅は磨きぬかれており、ピカピカと輝を放っていた。入り口を潜ると、塔の真ん中辺りにエレベーターの乗り口があったが案内人はいない。

セルフサービスである。

三人は一気に四階まで登った。

「うおっ！ すんげえーッ！ すんげえーッ！」

施川は感嘆の声をあげた。

「峪口っ！ 写真、写真撮ってよ」

湖面を吹き抜ける風が窓から吹き込み心地良い。

「まだ、上があるよ。ここからは階段だ」

施川はドンドン上に登って行く。

三人もそれに続いた。

「おやあゝ、まだ上があるぞ。おーい、行くぞおーッ！」

「おゝお、バカが張り切っちゃってよお」

「峪口いゝ、わしがいないと思って、麗ちゃんに変なことするンじやねえぞおゝ。邑中、よおゝく見張っているよおゝ」

「まあー……」

「あんなバカのゆうことは気にしないでください」

「うんだあ」

塔の天辺から見る夜景は実に素晴らしいものだった。特にライトアップされた日月双塔は、その姿が湖面にも映り、幻想的な雰囲気醸し出していた。

あまりの美しさに四人は、魅入られたように、しばらく無言のときを過ごしたが、その静寂は、やがて下から聞こえてくる喧しい声に遮られた。

どうやら他の団体客が登って来るようだ。

「あゝあ、せつかくの雰囲気が台無しだよ。まったく中国人はうるせえなあ。下りよう、下りよう」

「おいおい、俺たちはまだ上ったばかりだよ」

「いいじゃないか、わしがたっぷりと見ておいたから」

「ふんとにオメエは、わがままな男だなあ」

「へへへっ…、お陰さまで」

「なあーんがあ？」

既に施川の足はエレベーターに向いている。施川に先導されて一気に一階まで下り、こんどは銀の塔の入り口に立った。

「どうする、登る？」

と、峪口が訊くと、

「もう、ええわ。景色はあっちとほとんど同じだろう。それにこっちは階段なものなあ」

「うんだなあ。麗さんも疲れたんべえ」

「おっ、邑中君。ワンポイント追加」

施川が茶々を入れると、邑中は顔を朱に染めた。

3

銀の塔の一階には、なぜか景德鎮の焼き物が展示されている。

「これって、高いんだんべえ？」

張麗の話によると、なんでもお金で価値をはかるうとするのは、以前は日本人の特徴であったが、最近は上海人もマンションを見ればいくらだ、書画骨董を見ればいくらだと訊くので、添乗員に嫌がられているそうだ。

「よくわかりませんが、高いものでしょうね」

張麗は邑中の質問を軽く受け流した。

「でも、見張りがいないんだから、偽物じゃないのかなあ。ねえ、麗ちゃん」

と訊く施川の質問に、張麗は応えなかった。

こつちこつち、という邑中の声に促がされて塔の外に出ると、大きな釣鐘と太鼓が置かれている。

「これ、はたいて（敲いて）もいいんだべえ？」

「はい、大丈夫です」

との返事を聞くよりも早く、施川はバチをつかんでいた。

「なんだあ、施川あゝ。俺あが麗ちゃんに訊いてんのによあゝ」

そんなことにお構いなしに、施川は器用に祭り太鼓のリズムを湖面に響かせた。

ピアノも見様見真似で覚えたと言語するだけあって、施川は音感が良いのか、太鼓も様になつている。

三人はそれぞれの悩みを吹き飛ばすように、代わる代わる太鼓を敲き、釣鐘を撞き、腹の底から笑いあつた。すると、

「じゃあ、私も……」

と張麗も三人の後ろに続いた。

「ああ、すつきりした。すつきりしたら腹が減ったなあ。へえへへへ……」

と施川が笑うと、

「私も。うふふふっ……」

「俺も。へっへへ……」

「うんだあ。飯、喰いに行くべえ」とみんなが同意した。

日月双塔の上にはわずかに楕円がかつた月がかかっている。

明日は中秋節、見事な満月が見られるはずだ。

五、チップはいただけません！

1

タクシーを拾って五分、

「このレストランでよろしいかしら？」

「麗ちゃんのお奨めなら、ぼくは文句ありません。峪口、文句ある？」

「へっ、ないよ、ない」

四人は木龍湖の見える窓側の席を選び、物思いに耽るように、しばらく夜景に魅入っていた。

明るくは振舞ってはいても、みなそれぞれ悩みがあるものだ。

峪口は断わりを入れてから、タバコに火をつけた。すると施川が、

「ほんとうに、タバコは止めた方がいいぞ」

「そうだな……」

峪口は火をつけたタバコに口をつけず、灰皿でキュッキュッと揉み消した。

真剣に友を気遣う施川の言葉が心に凍みたからである。

「麗ちゃん。お任せしますから、美味しいものをたくさん注文してください。でも蛇と犬はけっこうです。へへっ……」

「まあ、施川さんたら、ほんとうに注文しますわよ。ほほほ……」

「邑中、試しに蛇を注文するか？」

「駄目ダアよお。俺あ、長いものと丸っこいのは駄目だからよお。

もう少し大人になってからにすんべえ」

「なんだ、丸っこいのって？」

と訊く峪口に、邑中はゲエロ（蛙）と答えた。

「とにかくビールもらってください、麗ちゃん」

元気よく施川が声を張りあげた。

「地元のビールがあるんですけど、それでよろしいですか？」

「はいっ、けっこうどえーす。冷えたやつをお願いしまーす。邑中は水か？」

小姐が持ってきたビールに手を触れた施川が、

「よし、これならいい。お姐さん、もう三本ね」

と、早速ビールを追加した。

中国のビールは一般的にアルコール度数が低く、どれを飲んでも同じような風味で特徴がない。どうやら、最初に外国から導入されたバドワイザーの影響らしい。中国人は最初に井戸を掘ったもの（入ったもの）を尊重する帰来があり、中国産の有名な青島ビールなども、ご多分に漏れずバドワイザーと似たり寄ったりの味がする。日本の銘柄も全て出揃っているが、日本とは異なり、サントリーが大きなシェアを占めている。しかしどのメーカーのビールも、ラベルを取ったらわからないほど味が似通っていて、ビール好きにはいささか物足りなく感じられる。

2

前菜が出てからしばらくして、小姐がビール袋を提げてやって来た。

袋にはなにやら蠢くものが入っている。

「た、峪口い……。姐ちゃんなんか持ってきけど、まさか蛇じゃあんめえなあ？」

邑中が耳元で囁く。

「ほほほほっ……。邑中さん、ご安心ください。注文したお魚を確認してくださいって、彼女が言っています」

「あんれ、聞こえたんかあ」

「当たり前だろう、デカイ声で。魚ですか、どれどれ……」

袋を覗き込んだ施川は、ウヘッと素っ頓狂な声をあげ、もう一度中を覗き込んだ。

「黒くてクネクネしているから、蛇かと思ったけど、よく見りゃ鯰だあ、こりゃ……」

「どおーれ……？ ふんとだあ、鯰だ。日本のと少し違うけど、髭があるし、顔も確かに鯰の面だあ」

「なんだ邑中には、鯰の親戚でもいるのかあ？」

「うんだあ、ここにいんべえ。頭の光つているところなんか、そっくりだんべえ」

と言って、邑中が施川を指差した。

「あつ、こいつ、わしの一番気にしていることを。その口に手を突っ込んで、ノドチンコガタ言わすぞ」

「あゝあ、おつかねえ。でもよお、オメエも古いなあ。由利徹だんべえ」

「うふふふっ……。日本でも、この魚を食べるんですか？」

「うんだあ。あんまし一般的じゃねえけど、喰うなあ」

「わしは、ほれ、仕事の関係で岩槻にいたろう。あの辺りの名物で、よく喰ったなあ」

「そうか、施川はしばらく住んでいたものなあ。天ぷらかな、やっぱり鱈は……」

「蒲焼が美味しいよ、淡泊でさ。張麗さん、こっちではどうやって料理をするんですか？」

「そうですねえ……、だいたいはぶつ切りにして炒めますね」

張麗の言う通り、出された料理は見た目はともかく、どれも美味かった。

「ああ、うんまかったあ」

「邑ちゃんにもわかったか。昼の店よりずっと美味かったな。麗ちゃん、ありがとうございます」

「ほんとほんと、張麗さんありがとうございます」

「いいえ、なにを仰いますか。すっかりご馳走になりました、こちらこそありがとうございます」

「峪口君、邑中君。ここはわしが奢るけん、精算をしてくれ」

「またまた、ええ格好しいが。どうせ、後で割り勘ってゆうんだろ」

「凶星！」

「施川あゝ、いいってばよお。俺あが銭っ子払うからよお」

「いいの、いいの。割り勘、割り勘」

「それでは私も……」
「と、とんでもありません。麗ちゃんからお金など、とつてもとつても。こんなむさい男がいるにもかかわらず、ご同席していただいただけで光栄でございます」
施川が邑中を指差しながら言うと、
「オメエ、そんなに卑下すんな」
と邑中が切り返した。
「おおっと……、邑ちゃんも最近やるねえ」
「ほほほっ……」

3

「え、えーッ！ …… たったの百八十元？」
峪口が伝票を見て驚きの声をあげた。
「お高いですか？」
「いえいえ、逆です。あまり安いものですから、記入漏れがあるんじゃないかと」
「私が確認しましょうか？」
峪口から伝票を受け取り、チェックを終えた張麗が、
「間違いありません。全部入っていますわ」
「麗さんがゆうなら間違いないでしょう。……けれど、それにしても安い」
峪口はもう一度伝票に目を落とした。
「少ないんじゃないんじゃないの」
「そうもいかないだろう。張麗さんに迷惑がかかるかもしれないぞ」
「そ、そうか、それは駄目だ。そういえば、さっきの店、六百九十元だったよな」
「うんだあ。ひとり二百三十元だあ。ふんでも、施川は二百元しか払わなかったけど」
「おっ、まだ覚えていたか。しつこい奴だ、峪口を見習いなさい」

「そつだ施川、三十元払えよ」
「げげつ、ブルータス、お前もか」
「それにしても三人で六百九十元だなんて、いったい、なにを召し上がったのですか？」
今度は張麗が驚きの声をあげた。
「桂魚とか、雉とか、ええと……」
「そんなに高いものは頼んでいませんねえ。三人で六百九十元というのは、完全にボラれていますね。困ったものですわ。外国人と見ると直ぐに吹っかけるンですから……。なんでしたら、これから文句を言いに行きましようか？」
「いえいえ、いいンですよ」
「そつだな、峪口。桂林の経済に貢献したと思えば、腹も立たねえよな」
「はっははは……、まあ、そつゆつことにしておこうか」
「うん駄目んどくせえしよお。それにたかだか一万円ぐれえの話だんべえ」
「まゝあ、みなさんはお金持ちナンですなえ」
「へへへへ……、大したことねえべよお」
「バゝカ、皮肉だよ」
峪口がお釣りを持って来た小姐に、その二十元はチップとして取っておいてと言うと、
「いいえ、いただけません」
と、きつぱりと断わられた。
「ああ、驚いた。これこそ驚いた」
「どうしました？」
「いえね、お姐さんにチップを渡そつとしたら断わられました。中国に住んで六年、初めての経験です」
「まあ、この辺りでは、そつゆつお店がけつこつ多いですよ」
「経営者の考え方ナンでしょうか？」
「そつでしようね。ここは確か、日本人の経営のはずですわ」

「いやあー、お陰でボラレタ不快感が消えました。いい教育をしていますね。我々も見習わないと」

4

上海で飲食業を営んでいる峪口は、従業員のサービス感覚のなさにいつも辟易とさせられていた。

いくら教育にお金と時間をかけても、お客様から常々、笑顔がない、愛想がない、釣銭を投げられたなどと苦情を言われ、いったいどう教育すればと悩んでいた。

このとき峪口は、上海人だけでなく、素直な地方出身の従業員を採用することを思いついた。

「峪口さんは、どんなご商売をなさっているのですか？ レストランですか？」

「日本のファーストフードです」

「峪口はこう見えても、日本で有名な会社の上海の責任者ナンですよ」

「施川、こう見えてもは余計だよ」

「ふふふっ……。そうですか、お偉いんですね」

「いいえ、私がオーナーというわけではありませんから」

「わしらはしががないサラリーマンです」

と施川が茶々を入れると、

「俺あはしがねえ百姓だあ。土地はいつぺえあっけんどよあ」

と邑中が付け加えた。

「お大尽さまあ、年貢を待ってくださいえ。わしら百姓は首を括るしかねえだあ」

「駄目だ、駄目だ。代わりに娘を差し出せえーッ！」

「……………？」

「なにバカやっているんだよ、麗さんが呆れているだろうが……………」

「なんだかよくわかりませんが、ほんとに面白い方がたですね。」

漫才ですか？」

「あんれえ、中国にも漫才があんのけえ？」

「ええ、もちろんあります。面白いですよ」

「へーえ、そうナンだ」

「施川さんと邑中さんなら、中国でも人気者になれますよ」

「はっははは……、二人とも顔の面白さでは誰にも負けないかも知れませんが、なにしろ頭が悪……ではなくて、言葉ができませんからねえ」

「おつ、峪口いゝ、わしの頭がなんだつてえ。えーえ、顔がどうしたつてえ。できそこないの熊男と一緒にするなよな」

「へえへへっ……、てえして変わんめえよお」

確かに施川と邑中は、体型も似ているしヒゲも濃い。

明日は仕事が入っているという張麗に、施川は未練たらしく、明日の夜はどうですか、としつこく食い下がっていたが、明日はどうしても無理と断わられ、ようやく納得した。

タクシーで帰途についても、まだ未練がましく、

「あゝあ、もう会えないのかあゝ。わしの桂林の恋も終わったなあ

……」

などと勝手なことを呟いていた。

「オメエは、ほんとにバカだなあゝ」

「余計なお世話じゃ」

そんな二人を横目に、峪口は張麗から渡されたメモ書きの入っている財布を、ズボンの上からそつと押さえた。

第六章 旅のメインイベント、瀋江下り

一、綺麗なトイレ

1

今日は移動日。

荷物を手早くまとめ三人は、朝食をとるために一階レストランへと向かった。

「この食事が一番美味いわ」

と大声で、施川は添乗員に皮肉を言ったが、もちろん彼女には通じない。

十月六日は中秋節、にもかかわらず、朝から真夏並みの日差しが観光バスの窓から差し込んでいる。

峪口、施川、邑中の三人を交えた上海からのツアー一行は、今回の旅のメインイベントともいえる瀋江下りの出発地、磨盤山の碼頭へと向かっていた。

ホテルを出てから一時間ほどが経過。

一人二本ずつ、と持参したはずの缶ビールのうち三本を既に飲み干した施川は、先ほどから静かな寝息を立てていた。

よく眠る男である。

「よお〜、峪口い〜」

いきなり目覚めた施川が、尿意を模様したと峪口に訴えた。

「そうはゆってもなあ……。後三十分ぐらいだそうだから、もう少し我慢しろよ。まったく三本も飲むからだよ」

「ふんどだよお〜、ガツガツ飲むからだよ。罰だ、我慢しろ」

「駄目、もう駄目。なあ、頼むよ、この通りだ。バスを停めてくれえー。停めないとここで遣っちゃうぞ」

施川が手を合わせ哀願のポーズを取った。

「チエツ！　しょうがねえなあ。我慢しろ、漏らすなよ。頼んでみるから」

「シエ、シエ（謝謝）」

峪口の訴えに女性添乗員が気を利かして、トイレタイムにしましよと、バスを停めてくれた。

真つ先に施川が飛び出すと、ぞろぞろと数名の男性がバスを降りた。しかし女性たちからは、こんなところはできないと、苦情の声があった。

「ふうう。あゝあ、すつきりした。ほらな、わしだけじゃないだろう。あつ、熊もいる。あいつ……。みんな我慢していたんだ。わしに感謝しなさい」

「おい、こら。汚い手で触るな。手を洗う場所なんてなかったろうが」

「へへへっ…、大丈夫だよ、ほとんどビールだから。アルコールで消毒したのと同じようなモンだろ」

と施川が言つて、戻ってきた邑中に、

「こら、熊ツ！　わしに文句を言つてたくせに、自分も行ききたかつたんだろうが……」

「ついでだんべえよお。俺あ我慢できたけど、これも付き合いつてもんだべえ。日中友好だべよお」

「つたく、調子のいい奴だなあ」

「オメエには負けるけんどよお、なあー。峪口いゝ。へへへっ…」
「うんだうんだ」

2

それから三十分ほど走ると大きな駐車場に到着した。

随分早くホテルを出発したが、既にたくさんバスの到着しており、船着場は観光客でこった返していた。

一斉にトイレに向かう女性群を見て、

「こんなときは、つくづく男に生まれて良かったと思うよ」と、施川が実感を込めて言った。

「トイレってゆえば、桂林のトイレはとても綺麗だな」

「そうそう、どこだったっけ？ ほら、陸君たちと一緒に行った……」

「蘇州か…、杭州か……」

「うーん……？ ほら、ベンツ貸し切りで、黄色いお寺のあったところだよ」

「寒山寺か、それなら蘇州だ」

「いやあー、あれには驚いたのなんのつて。腹の具合が悪くなつて、峪口から紙をもらつて便所に駆け込んだら、床に穴が五つ並んでいただけなもの」

「仕切りのないトイレだろう。あれには参るよなあ」

「ふんとか？ どやってやるんだ、ウンコ？」

「そりゃあ、考えてみなさい。穴しかねえんだから……」

「なんだあ、他人のケツメド見てウンコすんのかあ。俺あには絶対できねえ」

「いや、別に人のケツの穴を見なくてもいいけど。仕切りもなにもなしだからナ。好きな方を向いてやれよ」

「あんときは誰もいなかったし、非常事態だから、やったけどね。誰か入って来るんじゃないかと心配で、心配で……」

「杭州もそうだよ。蘇州とか杭州といえればかなり有名な観光地じゃないか。でも、トイレとかゴミとかにまるで気を使っていない。川なんてドブだもの、いずれは廃れるな、あれじゃあ」

「その点、桂林はすごいよ。市内のトイレはどこも掃除が行き届いているもの」

峪口はそのことにとても感心した。

中国の観光地はいずれも金儲けが第一で、環境の保全是二の次である。

世界遺産でさえも観光客が優先で、平気で手を加えてしまう。

桂林の立て看板に、

『これ以上自然を破壊すると、世遺産から外される恐れがあるので協力するように』

との注意書きがしてある。

二、風光明媚を絵にしたような風景

1

川面に待機している数十艘の船は、どれも同じ形で五、六十人ほどが乗れる大きさだ。

船の一階がテーブルと椅子のついた指定席、風景を眺めるための二階には、お飾り程度の小さな屋根がついているが、椅子はなかった。漓江下りが始まってても観光客は誰も二階へ行かず、持参したお菓子や果物を食べながらお喋りを楽しんでいた。

すると昼食の注文取りがやって来て、五十元以上注文をすれば二階に席を用意すると、しきりに勧めている。一組の家族連れが手を上げた。

見れば齒の遅いオヤジさんのいる同行者である。

「俺たちも注文しようか？」

と峪口が二人に訊くと、

「いいよ。どうせ美味くねえんだろう」

「いいよ。どうせうんまくねえべえ」

二人は声を揃えて否定した。

「あれだろう料理は？ さっき見たけど、川エビと田螺、それと変な魚の唐揚げ。どう見ても、美味そうじゃねえもの。それに船の後の調理場、あそこで作っているんだろう。川の水をそのまま使っているんじゃないの」

と施川が付け加えた。

「弁当つくから、いいか。不味いとは思っけど」

「いいよ、どうせあれと同じようなものだろうから。船を降りてから、なにか美味しいもの喰おうよ」

「うんだなあ。弁当つくンじゃいいべえ」

「でも、お二人さんよ。この川下り、四、五時間かかるンだけ」

「ふ、ふんとかあーッ!? そんなにかかんのかあ。今、九時半だんべえ。うんと? 着くのは二時過つてことかあ。めえった(参った)な、そりあーよあ」

「施川君。ビールも売っていることだし、便所もとりあえずあるから、まあ、安心して飲みなさい」

「俺あどおすべえ?」

「あんたは、とりあえず寝てなさい」

川の兩岸に広がる河川敷には、のんびりと水牛を追う農夫の姿があり、実にのどかな雰囲気を醸し出している。

水牛は一見厳つく荒々しいイメージを抱くが、とても穏やかな性格だという。

川の浅瀬では水牛が全身を水に浸け頭だけ出して、まるで温泉にも入っているような、穏やかな表情を行き交う船の乗客に見せていた。

2

三十分ほど船が進むと、乗客はぞろぞろと二階にあがりだした。

案内図によると蝙蝠山の辺りである。

「おい施川。邑中。俺たちも上に行こう。この辺りから景色が良くなるらしいから」

「そういうことか。どうも聞いていた桂林の景色とは違っと思っていた。なるほど、写真で見たような山々が見えてきたわ」

船はのんびりと川面を下っていく。

やがて、それこそ風光明媚を絵に描いたような風景の草坪風光、冠

岩と景色は移り変わっていく。

「おおつ、峪口い〜。これだ、これだよ。これこれが、桂林だよ」

「ふんとだあ〜。俺も写真で見たことあんど」

二人は興奮気味に感嘆の声をあげた。

「お二人さん。……まだまだ、これからだよ、本番は……」

「へーえ、そうなの？」

両側に連なる奇岩、異岩の連続攻撃、周りでもシャッター音が絶え間なく響いている。

国人は実に写真が好きで、撮られる方は恥ずかしげもなくポーズを決め、うっかりしていると、どける、どけるとばかりに身体をぶつけられる。

「危ねえじゃねえか。もし川に落っちいたらどうするんだ、ポケット！ 声ぐらいかけろ、つたく」

「施川あ〜。怒んなよあ〜」

恋人らしき二人連れはすっかり自分たちだけの世界に入り込んでおり、辺りの人間など目に入らないほどの熱々振りを見せつけている。川の水深は深いグリーン、出発の地点よりだいぶ透明度が増してきた。岸边には孟宗竹の竹林が、どこまでも延々と続いている。

切り立った崖が多いが、川岸には時々砂浜となっているところも出てくる。

そういったところには、近くに村があるとみえて、船着場があり、洗濯物も干されていて、生活の臭いがした。

この辺りも見せ場のひとつで、パンフレットには波石風光と紹介されている。

鵜飼の漁師が多いとのことであるが、残念ながら見ることはできなかった。

時々、岸辺を散策する観光客らしき人たちの姿も目についた。

「施川、俺たちもあそこを歩きたいな」

「ああ、釣りもしたいしな。もう、長いことやってねえなあ。学生のころは二人でよく釣りをしたなあ……」

二人は学生時代、お金がないこともあり、近くの川によく釣りに出かけた。
夏休みなどはアルバイトと釣りに明け暮れたものである。
社会人になってからも休日はほとんど一緒に過ごし、更には帰宅時に待ち合わせて一杯などということがしばしばあった。
それでいつだったか峪口は、“あなたは私と一緒にいるより、施川さんと一緒にいる時間の方が長いんじゃない”などと女房に皮肉を言われたことがある。

3

「ツアーコースになっているみたいだよ。この辺りの村に泊り込んで遊ぶんだって」

「いいなあ、それ。宿はどうするの？」

「日本の民宿みたいなのが、たくさんあるらしいよ」

「民宿か……。学生のころ、よく旅行したなあ……」

「うんでもよお、三人だと、ていげい（大概）途中で喧嘩別れになったんべえよお。オメエら、わがままでかななあ」

と言う邑中の言葉で、峪口の頭を学生時代の思い出が過ぎった。

「そうそう。……北海道のとき、この三人で行って、途中で別行動したんだよなあ」

「うんうん、覚えている。でも、あのときは勢いで別れたけど、一人になった途端に寂しくなっただなあ」

施川が遠い過去を懐かしむように、しんみりと告げた。

「オメエもか。実は俺もだあ。別行動ってたってね行き先はだいたい一緒だんべえ。二人の姿を見かけるたんびによお、よっぽど声かけんべえと思っただけんど、やっぱり意地だんべなあ、声かけらんねえかった」

邑中も当時の気持ちを正直に表現した。

「一日目はよかったけど、二日目くらいから、合流を約束した日が

待ち遠しくてさあ……。四日後に約束の場所で落ち合ったじゃない。あん時、実は俺、朝早くから近くをフラフラして、約束の時間がくるのを今か今かと待っていたんだ」
峪口も初めて告白した。

などと昔話に浸りながら、次々と訪れる山水画の世界に三人が魅入られていると、船の従業員がガタガタと二階の特等席にテーブル席を逃れ始めた。

その如何にも遠慮のないガサツさが、三十数年前の思い出に浸る三人を現実の世界へと引き戻した。

「まあーったく、もうすこし静かにやってほしいよな#。せつかく、心が俗世間を離れて幽玄界を彷徨っていたのに、台無しだよ」

「幽玄界か、……いつもながら上手いことをゆうねえ、施川さんは。シャングリラが桃源郷なら、ここは幽玄郷か」

「でも施川じゃ、意味はわかってねえべえ。へへへ……」

「あいつらだ。あのサトウキビの皮を歯でバリバリ引き剥がすオヤジがいる。おやおや、また、たくさん注文したねえ。喰えんのかよ、あんなに。なんなら、手伝ってやろうかあ」

「どうぞ、一杯、なんてことは絶対にゆわないだろうな。俺たちもビールでも飲もうか、施川？」

と、二階にいた客が競って一階に下りて行く。

どうやら昼の弁当が出る時間らしい。

三、羅漢果のにおいは ?

1

三人が一階の席に戻ると、

「あれゝえ、俺たちの席に誰か寝ているぞ。あいつだ、添乗員にネチネチと文句を言っていた男。おゝお、いい気なモンだよ。蹴飛ば

してやるうかな」

「止めとけえよお、施川あゝ。中国人全員を敵に回すつど。俺あゝ、知らねえかな。弁当をもらって上で喰うべえよお」

争いごとを極端に嫌う邑中が、慌てて施川を制する。
しかし峪口は、邑中が決して怖いから争いごとを避けるのではないことを知っている。

邑中は、切れた自分の存在が一番怖いのだ。

客室内の喧騒に、その寝ていた男が薄目を開け、その場の状況を察したのか、

「スイマセーン。アリガト、アリガト」

と日本語で言いながら起きあがり、峪口たちにお辞儀をした。

「あつ、いえいえ、どうぞ、どうぞ。そのまま、そのまま」

激しい言葉とは裏腹に、施川は調子のいい男でもある。

「ほゞれ、喧嘩しねえで、よかつたんべえ」

三人はもう一度二階席に戻り、床に直接ドツカリと胡坐をかいた。

「それにしても暑いなあ。十月だつてのに、三十度は超えているだろつ」

「広西省は亜熱帯だからな」

屋根のない二階には、真夏並みのキラキラした太陽が容赦なく照りつけている。

「あの家族の席はいいなあ。庇つきだものなあ。よし、わしはシャツ脱いじゃおつと」

と言う施川に同調して、峪口もシャツを脱いでしまった。

「なんだよあゝ。オメエら、恥ずかしくねえのかあゝ」

「いいから邑中も脱げよ。恥ずかしいって面じゃねえだろう」

「そうだ邑、オマエも脱いじゃえ。でも、パンツは脱ぐなよ。いくらポコチンに自信があつても出すなよ」

「アホかあ、施川あゝ。俺あ、そこまでアホじゃねえ」

と言いながら邑中も裸になった。

胸毛が凄い。

背中にも毛が密集している。

「お、お、久しぶりに見せてもらったけど、相変わらずすげえな。まるで熊だ。シャツを着た方がいいぞ。鉄砲の弾が飛んでくるかも知んねえからナ」

施川が邑中をからかうと、

「だんべえ、だから俺あ嫌だつてゆつたべえ」

「はははは……。気にするな邑中。いや、立派なモンだ。うん、男として羨ましいよ」

「へへへ……。そうだんべえ。施川もヒゲは濃いけど、身体と頭はツルツルだもんなあ」

と邑中が逆襲する。

「ツルツルだとお。わしの一番嫌いな言葉だ」

と言って、施川は邑中の背中をビターンとたたいた。

「へっ、いてえーっ！ か、勘弁してくんろーっ！」

「勘弁できねえ。うりうりうり……。それにしても不味い弁当だなあ」

「あへっ、勘弁、勘弁。うんだなあ。喰うモンねえべよ。これ、なんだべえ？」

邑中がなにやら得体の知れないオカズを箸で摘み、川にポイツと捨てた。

「おっ、おおーっ。それに、なんだこのビールは。ぜえーんぜん、冷えてねえじゃねえか」

「まあまあ、お二人ともそう文句をいいなさんな。まあ、これが中国の一般庶民の旅行だと思ってさあ」

「峪口い、オメエは辛抱づえなあ。オメエはもう中国人になったんだんべえ」

「へへっ……。そうかもしれないな。おい施川、ビールまでうつちやる（捨てる）なよ」

「そりやまあ、もったいねえから飲むけどよあ」

辺りがやけに騒々しくなった。

どうやら三人は寝入ってしまったようだ。

またぞろ、昼食を済ませた乗客が二階に上がって来たのだ。

九馬画山、黄布倒影と続く景色が美しい。

座り込んだままで、他の乗客の行動を見ていると、二十元札を鬻し、盛んに記念撮影を始めた。

どうやら、黄布倒影といわれる風景が、二十元札のデザインに使用されているようだ。

「そうなの。峪口、持っている？」

「あるよ」

受け取った施川が、

「どれどれ、こつちか……。なるほど、ここだ、ここだ。確かに、

ここだ。峪口、写真を頼むよ」

二十元札を顔の近くに鬻し、施川がポーズを決めた。

そして撮影が終わると、再びどっかりと床に胡坐をかいた。

「おいこら、俺の金を仕舞い込むなよ」

「あらあゝ、バレちゃったあゝ」

「ほれ、俺あにも貸せつてばあ。峪口いゝ、俺あも撮ってくんど」

時々、外人客満載の三階建て豪華客船が、三人の乗った船を追い越して行く。

「外人とは船も違うのか、わしらも一応ゲエンジン（外人）だけどな

あ。もつとも、峪口は違うけど。あゝあ、それにしても景色見飽き

たな。まだ終点に着かないの？」

「まだ、十二時半だよ」

「ということは……。まだ残りが二時間以上か。いくら珍しい風景でも、これだけ続くと飽きるな」

確かに、行けども、行けども変わらない景色に、峪口も少々うんざりとしてきていた。

邑中も隣でデカイ欠伸をしている。

他の乗客たちも同じとみえて、一人減り、二人減りといった具合に抜けていく。

そしてとうとう、三人の他は熱々のアベックだけとなっていた。

「おお、いいねえ、うらやましいねえ。バカイ（若い）つてのは素晴らしいことだ。それにしても、俺たちは眼中にないみたいだな。抱き合ってキスマで始めちゃったよ」

3

施川は螺？山と呼ばれる異形の山に少し興味を示しただけで、もう一回寝ようと呟いて、床にゴロリと転がってしまった。

峪口にもその後の記憶はなかった。

ドンと、船が着岸する振動で三人は目覚めた。

到着地の陽朔県である。

あれから二時間も寝ていたらしい。

中国は省があり、次に市、そして県、鎮となるが、上海市や北京市は政府の直轄都市として、省と同格、或はそれ以上に位置づけられている。

「ふあ、やつと着いたかあ……」

「ちよつと長すぎるなあ。二時間もあれば十分だな」

と、峪口が言うと、

「どんな美人も三日一緒にいれば飽きる、ということか。そう言うことだ、お二人さん」

着岸してもいちゃつくアベックに、施川が言葉を投げかけた。

「うんだ、うんだ」

邑中が実感を込めてうなずいた。

駐車場に戻る途中の売店には、いろいろな果物が並んでいた。

南国の所為か、上海よりも果物の種類が多い。

峪口がその中のテニスボール台の大きさで、緑青のような深い緑色

をした丸い果物を手に取った。

「パッションフルーツかな、これ？」

「峪口いゝ。……羅漢果、って書いてあるよ」

「ラカンカ、このまま喰えるのかなあ？ ……よし、じゃあ二個。

えっ、五個買え、十元でいいって。じゃあ、五個もらうわ」

羅漢果を観光バスに持ち帰ると、運転手が、

「車内で食べちゃ駄目」

と慌てて注意を促がす。

峪口がなぜと訊くと、とても臭いので、みんなが迷惑するから、との答えが返ってきた。

どうやら、果物の王様といわれるドリアンと同じく、悪臭を発するらしい。

「でも、とても美味しいそうだよ、施川君」

「あれっ、ほら、あのおばさん……」

「羅漢果を喰いながら来るね。……なあるほど、ストローで中身を吸っているんだ。あれなら臭わないな」

羅漢果は、桂林でもこの地でしか栽培ができない貴重な果物で、収穫の季節には盗難を恐れ、四六時中見張りを立てるそうだ。

それにしては安い。

上海でも乾燥させたものを漢方薬の一種として売っているが、なんに効くのかは、峪口も知らない。

中国では神様の果物とも呼ばれているそうだ。

四、昨日も鍾乳洞、今日も鍾乳洞

1

「これから、どこへ行くの？」

「ええと、ね？ ちょっと待ってよ」

峪口は添乗員に大きな声で尋ねた。

すると、隣に座っている一人旅の女性が、

「鍾乳洞に行くそうですよ」

と、代わって答えてくれた。

それが糸口となり、峪口は彼女に話しかけた。

「どちらからいらつしやいました？」

「上海です。みなさんは？」

「私は上海から、彼らは日本からです」

「このこの、峪口いゝ、なに、話しているんだよぉー」

「まあまあ、少し待てよ。君はビールでも飲んで、静かにしていな

さい」

「俺あ、ビールは飲まねえ」

聞いたところでは、彼女は徐家匯に住んでいて、外資系企業の秘書をしているとのことであった。

峪口が上海に駐在を始めて、最初に住んだのも徐家匯のマンションである。

徐家匯といえば、今や上海でも一、二を争う繁華街となっていた。

当時の徐家匯は開発中で、大きなデパートはいくつかあったが、道路は舗装されておらず、信じられないかもしれないが信号機などなかった。

峪口が現在住んでいる場所からは地下鉄一号線で三駅、歩いて約四十分の距離である。

なぜ四十分なのかというと、峪口は駐在した当初、徐家匯から現在のマンションに近い会社まで、健康のためにと歩いて通っていたのである。

最初に住んだマンションの家賃は当時の二倍、今では一ヶ月二千五百米ドル以上ということからも、その発展振りが窺えようというものである。

「なあなあ、なんだってばあ？」

「おつ、邑中君。随分と積極的だねえー。好みいゝ」

施川が探るような表情をした。

「ふ、ふんなんじゃ、ねえよお〜」

邑中が表情を赤らめた。そういえば、なんとなく邑中の奥さんとイメージが似ていると、峪口は思った。

「うん。……まあ、このツアーに対する不満をいろいろとゆってるな。内容も良くないし、ホテルも最悪、料理も悪いと……」

峪口は彼女との会話内容を、かいつまんで二人に話した。

「ふんふん、なるほど。旅行社のパンフレットだと、ホテルは四ツ星のはずだったんだ。でも、立地といい、部屋といい、どう見ても四ツ星とは思えないものな」

「ああ。上海に戻ったら、旅行社を訴えてやるってサ」

「性格きついな。俺あんち（家）と同じだあ」

邑中が声を潜めて言った。

「アンタのそこは、どうでもいいの。彼女、優しい顔をしているけど、激しいなあ」

「上海の女性を舐めちゃいけませんよ、施川さん」

峪口は実感を込めて言った。

2

ファーストフードという商売柄、峪口の会社にもたくさんの女性がいる。

その優秀さも然ることながら、その芯の強さと逞しさには、何度も舌を巻かされたことがある。

その分、上海の男がだらしがないと言えるのかも知れないが……。

「これから行く鍾乳洞もそうさ。なぜ、昨日も鍾乳洞で今日も鍾乳洞なんだ、って怒っているよ」

「うん、わしもそう思うよ」

と言って施川は、彼女に笑みを送り、ペコリと頭をさげ、

「た・に・ぐ・ちい〜、夕飯に誘えよ」

耳元で囁く。

「また、施川のわりい病気が始まったんべえ」

「麗ちゃんに怒られても知らねえぞお〜」

「遠くの麗ちゃんよりも、近くの……、ん、なにちゃん？」

「名前、Yang（楊）Yan（燕）さん。楊枝の楊に鳥の燕と書く」

「ツバメちゃん、かあ……」

「ツバメちゃんはないだろう。ヤンさんにしなさい」

「ヤンちゃん。……マダム、ヤン」

施川がなよつとシナを作り、節をつけて名前を言うと、邑中はヤンちゃん、ヤンちゃんと独り言のように呟いていた。

観光バスは船を降りた陽朔県から、桂林市内に向かって三十分ほど走り、冠岩鍾乳洞に到着した。

外で待つという峪口たちを添乗員は、“昨日のものより数段素晴らしいから、とにかく見てきてください”と説得した。

「施川。添乗員によると、昨日よりもいいらしいから、行こうか……」

「いいよ、ヤンちゃんも行くみたいだから、わしも行こう」

「オメエは、ほんとに現金な男だなあ。スケベ」

「ス、スケベエー……、うるせえ、ムツツリスケベが」

「こらこら、スケベ同士で喧嘩するんじゃない」

「おつ、邑中よお。一番のスケベ男がなんか言っているぞお〜」

「うんだあ。やっぱりなんてゆっても、峪口が一番スケベエだんべえ」

確かに添乗員がいうとおりで、スケールといい美しさといい素晴らしいものではあったが、どんなに美味しい料理も二日続きで、然も同じ味付けでは飽きるのが道理である。

また、中国の観光地はどこでもそうだが、一番の見所には必ず写真屋が店を出しており、タダでは撮影できない仕組みになっている。

この鍾乳洞もご多分に漏れず、そのような仕組みとなっていた。

それが中国人にとっては当たり前と見えて、誰も文句を言わず、素直にお金を払って写真を撮ってもらっている。

3

グルッと一廻りして表に出ると施川が、

「ところで、どうだった。ヤンちゃん、食事の件、オーケーだった？」

「いや、駄目だった。……食事内容を全部確認して、旅行社に苦情を言うんだそうだ」

「へーえ。……ほんとうにしっかりしているわ」

「うんだうんだ」

「ところでどうする、俺たちは？」

「麗ちゃんも駄目、ヤンちゃんも駄目か。はーあ、ため息が出ちゃうよ。よし、もう一度だけチャンスをやろう」

「誰に、やねん？」

と言う峪口の突っ込みに、

「もちろん、旅行社にさ。麗ちゃんの会社だろう」

「はははっ…、そうか。それにヤンさんと一緒に食事をしたいんだらう」

「あっ、たりいゝ。へへへ……」

「相変わらず調子のいい男だなあゝ、オメエはよお。奥さんに電話すんぞお」

「まあまあ、へっへへ……。女房には内緒、なッ！ おい、邑中しゃべんなよ。君はおしゃべりだからな」

「しゃべんめえよおゝ。俺あ、口が軽いから、約束はできねえけんぞ」

しかし予想に違わず、その日のメニューも一日目とほとんど同じものであった。

「ほら、ヤンちゃんは箸をつけないよ。怒っている、怒っている。」

くくくく」

忍び笑いをもらしながら、施川が峪口に尋ねた。

「よろしかったら、一緒に食事に行きませんか？」って、中国語でなんて言うの？　ここに書いてよ」

「止めとけよお。俺あ、知らねえぞ」

「そうだ施川。火に油を注ぐことになるぞ」

「そんなにすごいのか、上海女性は？　……」

「それは俺が、身に凍みて感じている」

と言う峪口の言葉を聞いた施川は、

「そうか、そんなに凄いのか。……君子危うきに近寄らず、だな」とブツブツ呟きながら、ようやく諦めたようだ。

「誰が、君子だあ？　笑っちゃうべよ。なーあ、峪口い。へっへへへ……」

邑中の突っ込みにも、施川は聞こえない振りをしている。

「ええい、くそッ！　焼け飲みだあ」

と言って、施川はビールを呷った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505y/>

半枯れトリオの旅日誌【中国・世界遺産桂林編】

2011年11月10日07時09分発行